第21回全国バズ学習研究集会

提案要項

期日　昭和61年８月21日・22日

会場　中京大学八事校舎

主催　全国バズ学習研究会

後援　愛知県教育委員会

名古屋市教育委員会

中日新聞社

中京大学

第 1 分 科 会　　基 礎 講 座

校内研修推進計画　広島県豊浜町立豊島小学校　谷水 永

1．主題　　「学力と人間関係を高める教育の創造」

2．研究テーマ・個性を伸ばし、児童の相互作用によって、集団の学力を高めていく学習活動のあり方。

3．推進計画 (1) 全教科．全領域でバズ学習にとりくむ。

(2) バズ学習による授業研究を通して授業内容を深め、言語力．表現力を高める。

(3) 生活バズの推進により基本的な生活習慣の向上をはかる。

(4) 縦割りの集団活動を行い、仲間意識を育てる。

(5) 豊高校区内の研究会、全国バズ学習研究集会等に参加し実践を交流し研究を深める。

(6) 指導講師を招いて研修を深める。

指導者　松尾健史指導主事先生　　宮本厚志校長先生

光保博文先生　　杉江修治先生（中京大教授）

(7) 健康・体力づくりは継続してとりくむ。

4．研修計画 (1) バズ学習（単元見通し学習）についての授業研究を行い10月24日（金）に公開研（県へき）を開く(教科社会科)

(2) 児童の相互作用をとおして一人ひとりを生かす話し合い活動をめざしてのアプローチ

・学習課題　・資料の精選　・発問の工夫　・評価の観点

・聞き方話し合いの仕方,発表の仕方　・ノートのとり方

(3) 子どもの願いを満たす学級経営を推進する。

・友だちのよさを認め合う学級

・本音の言える学級

「朝の会」「帰りの会」の充実

個人日記、班日記の活用と指導

(4) 地域課題をふまえた生活指導の充実をはかる。

・生活目標の具体化と実践・・・・児童会活動を中心に

(5) 縦割り集団活動を企画し実施する。(学期1回，年3回)

5．教科学習の評価の観点

(1) 課題は、子どもの学習意欲を高めるものであったか。

(2) 課題追求のための適切な資料・教具の活用がなされたか。

(3) 教師の発問・指導・助言は明確かつやる気をおこさせるものであったか。

(4) 理解の遅い子どもに対する手だてがなされていたか。
(教師の配慮・・・・子どもへの指導・助言・集団へのはたらきかけ)

(5) 課題解決に向けて話し合いは、深められたか。

6．校内研　公開研

月・日	研修内容	授業者	指導・助言者
4・24	研修計画立案・検討		
5・21	校内研	福田(6の2)伊藤(5年)	松尾指導主事
6・4	校内研	川崎(1年)金子(3の1)	宮本厚志先生
7・2	校内研	角井(4年)原野(6の1)	松尾指導主事
10・1	校内研	森岡(1年)　伊藤(5年)	光保博文先生
10・24	公開研究大会 (県へき連大会)	福田(6の2)川崎(1年) 伊藤(5年)金子(3の1)	松尾指導主事 宮本厚志先生
11・11	校内研	久保岡(3の2)	松尾指導主事
12・5	校内同和教育研修会		橋浜指導主事
2・12	校内同和教育研修会		橋浜指導主事

社会科学習指導案　指導者　豊島小学校　川　崎　芳　江

1．学年　第1学年1組　(男子　10名　女子　8名　合計　18名)

2．単元　がっこうたんけん　(2) ほけんしつ

3．単元の目標

認知的　・養護の先生は、健康に関する世話をして、私たちの学校生活をよりよくするために働いていることに気づく。

態度的　・観察や聞きとりによってわかったことを、絵や言葉や動作によって表現することができる。

・グループで協力して絵を描いたり、話し合ったりすることができる。

4．学習計画（4時間）

時	学習課題	実践活動
1	1，保健室を探検しよう。 ・保健室には、何があるだろう。 ・養護の先生は、どんな仕事をしておられるのだろう。	・観察の計画を立てる。 ・養護の先生の話を聞く。 ・保健室にあるものを観察する。
2	2，保健室にあった物を描こう。	・課題を知る。 ・どんな物があったか出し合う。 ・グループで協力して、絵を描く。
3	3，保健室を作ろう。	・課題を知る。 ・描いた絵を配置する。 ・置く場所がはっきりしない物はもう一度保健室で確かめて置く。
4	4，養護の先生になろう。 ・どんなことを思いながら仕事をしておられるのだろう。	・絵を見て、どんな時に使う物か考える。 ・課題を知る。 ・養護の先生のつぶやきをグループで考え、動作化する。 ・まとめる。

5．本時の目標

・保健室にある物や養護の先生の仕事が、自分たちにかかわっていることを知り、養護の先生は、みんなが健康な毎日が送れるように世話をしておられることに気づく。

6．準備物

・保健室のいす‥‥2　　・保健室にある物の絵

・ピンセット　　・脱脂綿

7．過　程

学習形態	学習活動	指導上の留意点
全体	1．掲示した絵を見ながら、どんな時に使うのか考える。	・けがの手当てや身体測定、視力検査等をしてもらったことを思い出させる。 ・けが・病気・測定に分けて、物がすぐ使えるようにしてあることに気づかせる。
	2．本時の課題を知る。	
	養護の先生になろう	
個人	3．養護の先生は、どんなことを思いながら世話をしておられるか考える。 ・心のテレビに映して考える。	・けがをしている時のことを想定して考えさせる。
グループ	4．二人組で、先生と児童になり会話をする。 ・交代して養護の先生の気持ちを探る。	・おかしい点とか、どうしてそう言われたのか等話し合い、深めさせる。 ・巡視し、困っているグループには助言し考えさせる。 ・早くできたグループには、ノートに書かせる。
全体	5．動作化する。 ・養護の先生とけがをした児童になってする。	・前もってどちらが先生になるかは話し合っておく。 ・見ている児童は、「よい」か「もうすこし」か評価する。
	6．まとめをする。	
	養護の先生は、みんなが元気にくらせるようにと思って仕事をしておられる。	
	7．次時の予告を聞く。	・給食のおばさんの秘密を探ろう。

第1分科会　　（基礎講座）小学校低学年のバズ学習

友だちを大切にする心を育て、仲のよい学級集団をつくる
―― バズ・セッションによる環境づくり ――

兵庫県姫路市立城北小学校　　柳内　翠

2

要旨

時代・社会・文化がどんどん流動し、変遷する中で、自分に与えられた教師の場をまじめに受け止め、自分に納得できるまでやりぬく・・・。その信条は少しもゆずらなかったつもりだが、子どもをとりまく環境は随分多様化してきた。

社会が便利になり、物質的に豊かになって、子どもたちは我慢するという経験を持たなくなった。したがって、自分と異った考えや、自分と異質なものを持つ友だちとのつき合いがうまく出来ない。

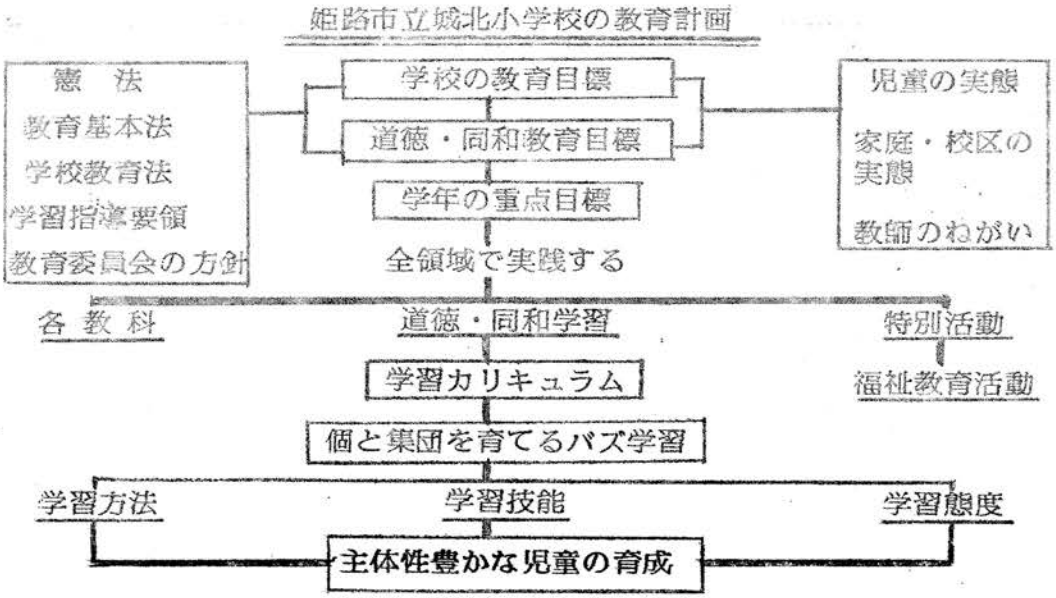
今こそ、あるべき姿をみつけ、なすべき人間に迫る教育を求めねばならないと思う

〝血がかよい・心がかよい・言葉がかよう学級集団づくり〟

を求めて、何をなすべきなのかを真剣に考えたい。

研究内容

1. 望ましい　学級集団をつくるための計画



2．低学年における心的環境づくりの一考察

低学年の子どもは情緒的で人間関係に敏感である。

一対一の接触で、情で結ばれた親子関係から生れる言葉や行動には、その子のもつ生地の姿が出てくるが、理を土台にした集団の中での子どもは、身構えているし心を閉ざす子もいる。ひとりひとりの子を自己実現させて　楽しい学級にしたい。

◎　それでは何をすればよいのだろう。

・おもしろいことを多く取り入れよう。（体を通して親和感をもつ）

握手・腕ずもう・指ずもう　　いも虫ジャンケン・手つなぎおにごっこ

・おもしろいだけではいけないのでは　　（言葉をかわして　友だちを知る）

あいさつ　　名前おぼえゲーム・電話あそび・背文字送り

◎　学級が統一されていく方向があるのだろうか。

・学級のメンバーが　心理的に結ばれていく工夫をする

きちんと話を聞きとる子になる

何でも話せる子になる

・ひとりひとりのつぶやきを聞く子になる

聞く態度	話す態度
視線（相手の目をみて）	話し方（はっきり・ゆっくり）
反応（うなずきながら）	声の出し方（状況に応じて．．）
比較（共通点　相違点）	表情（顔をみあわせて）

・学習の中での約束・しつけは　学習の中でつくりあげていく。

言葉を育てる

◎　個々の子に定着していく力を　どうつけていくか。

・ルールを守る心　　順番を待つ心やゆずり合う心を育てていく。

・相手をじっと見つめたり、集中してやれる心を育てていく。

心を育てる

◎　個人の態度を個人で変えるのはむずかしい。

・お互いを早く理解し合えるグループづくりをする

・意図的に編成する

2人組――4人組――8人組――16人組――32人組

行動を変えていく

力

・個々の心が　仲間へ向かっていくようになる。

1．相手の身になって考えた　ものの言い方が出来る子になる。

2．相手の良さをみつけて　ほめてあげられるし、自分もまねて出来る子になる。

3．相手のつまずきや　まちがいを笑わないで助けられる子になる。

4．即座に反応する子につられないで　冷静に考える子になる。

◎　学級に出来たカラーが、子どもに与える感化力になる。

・集団の志気が高まってくると、少々困難なことでも、それを乗り越えようとする緊張感が出てくる。

・生活経験のない子は、仕事の手順がつかめなくとも　他児の援助で相互に学びとっていくようになる。

月曜日の子のやり方を　火曜日の子がまねる。

悪いところは話し合い　次の日には改善してがんばっていく。

3．バズ・セッションによる　全員参加の授業

◎　どの子にも　ポジションをもたせる。

・答あわせ・本読み ――― 二人で「先生ごっこ」のくりかえし

◎　個の確立をはかって　グループで。

・自分の考えを言う・書く・線をひく。

・全員で話し合えるよう工夫をする。

自分の責任分野を大切にする。

ひとりひとりが　かけがえのない協力者となる。

わからないところが　わからないといえる。

◎　学び方を　学びとる手だて

・考えをあつめる時　　1 一人で考える時間を置く。

2 一人でできるだけ多く考え、それを出し合う。

3 良し悪しを気にせずに　グループに出す。

・全体に報告する時　　1 多数意見と少数意見を区別して、両方報告する。

・まとめる時　　1つけたし型・比較型・対立型・まとめ型

など子どもの発言を用いる。

◎　バズ学習のねらい

・全員の参加を容易にする。

・ひとりひとりの意欲を高める。

・さまざまな本音（考え方）が出せる。

◎　一斉指導の場合の　個へのかかわり方

・ひとりひとりの子の目を見つめて話す。（ゆっくり・しずかに）

・机間巡視からヒントを得る。（自問自答式に・子どもとの問答をまじえて）

・落ちこぼさぬ指名を。（問は具体的に・答える時間をかけて）

・子どもの発言は、表情豊かにうけとめて。（ニッコリ・じっと見すえて・感心して）

・大事な指示・まとめの言葉は　カード化する。

・板書は子どもとの応答の中で。

・発問は一問多答で。（T ⟶ P_1 P_2 P_3・・・・と続くように）

4．おわりに

学習はひとりひとりのものであると共に　学級みんなのものである。

『個が育つことによって、質の高い集団が出来ていく。』と言われている。教科指導の場にも、係活動や、仲間づくりの場にも、道徳的な生活指導の場においても血がかよい　心がかよい　言葉がかよいあう学級をつくり、ひとりひとりの子どもが生かせ、集団をもり上げていける教師でありたい。

第2分科会　基礎講座

研究主題　小学校高学年のバズ学習

愛知県春日井市立神屋小学校　山田　節男

3

1．バズ学習の基本的なねらい

「非行・いじめ・落ちこぼれ」・・等々は現在、大きな社会問題となつています。こうした事実を謙虚にうけとめて、原因の追求とともに解決にむけての研究や実践を進めていかねばならない。従来の学校での学習指導をふりかえると、ともすれば一斉学習の態勢の中で学力を高めることに指導の重点がかかり人間関係を培う分野を含めた面の指導が軽んじられてきたのではないか。人間関係の重要さを軽視した指導態勢が教科学習始め、他の活動分野においても重大な影響を及ぼしたと考えられる。学校での指導態勢の中で特別活動を含めた教科指導と生活指導との統合指導の重要さがあらためて見直されてきた。

組織的集団的態勢の中で行われる学校教育において、たとえ40人学級になろうとも、一人の教師が多数の児童に対して指導することに変わりはない。

バズ学習は学級という集団の中で意図的に児童相互の働きかけや協力により、個々の学力や集団全員の学力を高めることと、ともに望ましい人間関係の育成をねらっている。その基礎は集団の人間関係であり協力し、教えあい、確認しあう相互交流活動である。人間関係の重要性を認めない指導態勢は、教科指導を始め他のあらゆる分野にも決していい結果をもたらすとは考えられない。「学力と人間関係・教科指導と生活指導」の統合をはかろうとするのが、バズ学習の基本的なねらいである。

2．バズ学習が着目される理由

(1) 一斉指導のひずみ是正からの必要性

・学年が進むにつれて、活発に参加する児童がかぎられてくる。

・説明や指示の不徹底から生じる理解の低下

・排他的，競争的になることも生じる。成績の上・下位群が分化し固定化の傾向がみられることもある。

・学習における障壁（不充分な理解，未定着，誤認等）を克服するため。

(2) バズ学習でねらうもの

・学習に対する全員の参加度を高める。

・学習のふん意気の活発さ，なごやかさ。

・興味や関心，学習意欲の向上。

・相互作用による理解の深化・・・・確認，補充，訂正

・学習への自信，主体的学習への意欲，態度の育成。

・人間関係の育成。

(3) 相互作用（話しあい活動）により期待される効果

○ 他人の意見や考えを聞くことにより
・自分の考え方がはっきりする，誤りに気づく，ヒントを得る。

○自分の意見や考えを話すことにより
・自分の意見・考え方がまとまりはっきりする。
・評価することができる。

○他人から援助をうけることによって
・問題の要点、つまづきや誤まり等がわかる。
・いっそう 効果的な考え方，解き方ができる。能率的にできる。

○他人に援助を与えることによって

・自分の考えや理解がいっそう深まり確実となる。また不十分さにも気づくこともある。　新しい問題点の発見。

3．　バズ学習の実際

(1) 班（バズ分団）の編成法
4～6人編成　(2人でのペアーを考え偶数)
等質分団，抽せんによる分団，班長を選出あと抽せんによる分団
初期の段階では2人編成・・・・（高学年では4～6人編成）

(2) 編成期間　　3～4週間

(3) 班長の選出・・・・教師の指名，全員による選出，輪番制・・

(4) 班長の位置・・・・誰とでも話しやすい位置

(5) メンバーの位置・・・・問題児が隣接しない，男女にかたよらない。

(6) 話しあいの形
ア　話しあいの方法
・自由会話法
・輪番法
・対人法（隣接法）2人ペアーで
・テスト法（質問者は班長に固定する必要はない）
イ　内容によるもの
・協同問題解決
問題をみなで考える方法・・ヒントが多い，能率的な考え方，一方的な考えでいきづまること少ない。
・協同要約
各自が要約をして話しあいで修正していくことが多い。

・協同ドリル‥‥ドリル学習に興味や楽しさ。
・質疑応答‥‥わからないことを聞き教えあう。

（7）授業の一般的な流れ

ア．授業の組みたて

○準備過程‥‥スタートラインをそろえる。学習目標の明確化
（必要な説明．助言→個人で，分団で→発表，教師の補足説明）‥　（準備課題）

○中心過程‥‥本時の目標にせまるための中心課題，問題点の明確化ー理解

（必要な説明，助言→個人で，分団で→発表，教師の補足，まとめ）

○確認過程‥‥確認課題，自己評価，複習の要点をつかむ。
（必要な説明・助言→個人で，分団で→教師の補足・まとめ，次時予告）

学習を導くための主体は、常に教師である。教師の主体性，計画性が忘れられてしまっては、能率も効率も望めない。課題をバズ分団になげかけて、話しあい活動により更に深化し、よりたしかなものにしていく。

（8）バズ学習を進める上での留意点

ア　話しあいのルール‥‥最低の約束

「わからなかったら聞け」ー「聞かれたら教えよ」
必要以上の声を出すな。
相手の言うことはよく聞くこと。言うことは簡潔に。
合図があったらやめる。

イ．　話し合いの時間

時間を長くすることはよいとはいえない。
話しあう課題の内容にもよるが、長くても5分以内が望ましい。
時間の指示・能率化をはかる。
話しあいが、どのように進められているか、メンバーの参加度はどうかの配慮が大切。

ウ．　課題への取り組み

○ 課題の提出→取りくみ→発表→教師のまとめ，補足→確認の形態が一般的に考えられる。一時間の授業の組み立てと課題の適確さが欲求されてくる。

○ 課題について

・大課題，小課題‥‥あまり細かくするのは問題。
・大半のの児童がとり組めるような内容。
・学習のねらいにあった内容のもの。
・異質の課題は、ひとつずつ取りあげた方がよい。
・時間を与えすぎないよう→未解決→思考の方向化→教師の補足修正，まとめ。

エ．　その他

・話しがしやすい，思ったことが言いやすい――むだ話がしやすい
・注意がしやすい　――なれ合いになりやすい
・質問しやすい，すぐ教えてもらえる――依存しやすい

分科会　2　高学年のバズ学習

個を生かす学級集団つくり

――バズ学習による支持的風土づくり――

愛知県春日井市立松山小学校　田川正樹

〈要　旨〉

学級に所属するひとりひとりの児童が、自己を出し、自分の持ち味を生かしつつ仲間として助け合い、認め合いながら学ぼうとする。――そんな支持的風土をすこしでも創りあげていこうとしている実践報告である。

〈昨年度の反省〉

目標達成に関して、他の班や級友の発言、行動に対して点検する他人へのきびしさばかり強すぎて、人の悪いところをほじくり出す雰囲気があった。

（班競争のいれすぎ、点検活動が管理に走りすぎた）

1、実践内容　（5年　男子20名、女子18名）

学級の中に明るくやる気に満ちた前進的なトーンをなるべく早い機会に打ち立てることを1学期の学級経営の目標として出発した。

――1学期に教え、育てておきたいこと――

① 班を使っての係活動（1班－1係）、当番活動（清掃・給食）、日直（2名：この2名を班で支える）のまず形を教える。

② 班長には、仕事の分担の仕方、班会議の仕方、理想的な心がまえを教える。

③ 班目標を立て、その達成に向けて取り組ませる。

④ 学級行事等自分達の手で企画し、運営できる力を育てていく。

(1) 教師の姿勢で心がけたこと

「教師の姿勢こそ、何でも言える教室づくりの根原である」

ア、ゆとりを持って、児童の考え・意見をじっくり聞いた。

イ、班ノート、日記に書かれてあることで、みんなに知ってほしいこと、考えてほしいことを、児童が帰ってから「ぼくは考える」などと題をつけて板書し、翌朝話し合わせた。

ウ、良い絵本を読み聞かせた。（からすたろう、

エ、楽しい中に協力性を培う班対抗のゲームをとり入れた。

オ、班会議の時間を多くとってあげた。

(2) 班替えの経過

〈第1次班〉　4月4日（学級開きの日）

ア、班づくりの方法

・教師の手による名簿順の遍成、男女混合、4人班－5、6人班－3

・班長は班内互選　（8班遍成）

〈第2次班遍成〉　　5月12日

ア、班づくりの方法

「クラス替えして、まだよく知らない人も多いようなので、班替えしよう」と教師提案で決定。

・班長はやる気のある人（立候補）—10人
　　やってほしい人（推選）—2人　→8名選ぶ（新5名）

・班遍成は班長が指名した副班長とで別室で引き抜きによる遍成。

イ、教師からの注文

協力的な人ばかりとれば、あまり努力しないでも班はうまくいくだろう。クラスにとけこめないでいる人、忘れ物が多い人、勉強がわからずに困っている人をとってすったもんだしながらも班の人達ですこしでもよくしようと努力する班（班長）こそ優秀班なのではないだろうか。

ウ、班目標の評価

右のような評価カードを机にはらせ、帰りの会で評価しあう。

第2次 7はん	名前	村尾

はんの目ひょう

みんなで力をあわせて勉強をする。

目ひょうにむかってがんばりましたか。

	月	火	水	木	金	土
自分で	○	○	○	◎	○	○
はんで	○	◎	○	×	◎	○

◎　たいへんがんばった
○　まあまあがんばった
×　もっとがんばるべきだ

検 田川

〈反省〉

・達成できているか、いないか分かる目標を設定すること。
・目標達成に向けての取り組みこそ大切である。
・マンネリ化しやすい。

↓

？

〈第3次班〉　　6月7日

期間としてはまだ早いと思ったが、「班替えをしよう。　理由は①班長と副班長が慣れあってだらけている。　②もっとたくさんの人と仲良しになりたい。」と提案があり話し合いの結果、班替え決定。

ア、班づくりの方法

・班長はやりたい人（立候補）——11人
　　やってほしい人（推選）—2人　→8名（新4名）

イ、教師からの注文

- できるだけ多くの人が班長を経験してほしい。やる気さえあればあとは先生が教えます。班長をやったことのある人が何人かいるから、その時の経験を生かして、きっと支えてくれます。
- 第3次班で、クラスとして努力する目標を決めておきたいね。みんなして取り組み、今度班替えする時はその目標が達成されたかどうかも考えよう。1回班替えしたら、1つはクラスとして力をつけたいね。

第3次班で努力すること

① 係活動を活発にすること。

② 班長と副班長が班やクラスの先頭に立ってぐいぐいリードすること。

〈第4次班〉× 7月5日

「班替えしてほしい。理由は班でうまくいかないからです。」という提案があり話し合ったが、夏休みが近く今ごろしてもうわついてしまうだけということで、班替えは没。

〈支持的風土づくりはすすんでいるか〉

——班ノートより——

〈第1次班〉

班で相談しても単じゅんな答えしか出ないので、もっといろいろな意見が出るといい。（4月10日）

この班でよかったと思う。どうしてかというと、何でも「はやくやれ！」ではなくて、班活動の時は協力できるし、給食の時は楽しいからです。（4月14日）

このごろ、班の中で忘れ物をする人がすくなくてとてもうれしいです。（5月3日）

〈第2次班〉

今日、算数のドリルをやった。班単位で黒板に書くことになったので、私は算数係ということもあって、私たちの班に当ててほしかったが、○○君がやりたくないと思って手をあげなかった。そうしたら、○○君が「村松さん手をあげてよ。」と言った。あわててあげたが、あてられなかった。○○君はがっかりしていた。私は「今日はいやにまじめだな」と思った。これからもこの調子でがんばってほしいな。（5月15日）

今日、みんなと新聞づくりをやった。やったといっても、なかなか意見が出なくてほんのすこしだけだった。新聞づくりがすすまないので、ぼくが書いてきた。けど、その書いてきたのをみんなに見せることはずかしかった。話し合ってもないところを書いてきてあったし、なんかぼくばかりやっていてみんながかわいそうだ。（5月30日）

〈第3次班〉

第3次班でがんばることのひとつ「係活動を活発にする」ことが私達の班では全々うまくいっていない。もう少し工夫してみたいなと思います。

（6月12日）

このごろ小林君がしっかりしてきて、勉強もだいぶよくなって、私もみならいたいです。けど○○君は後ろを向いて話しかけたりするので、水野君やみんなに注意されています。（6月18日）

きのう給食の時、じゃがいもが足りなくなってあわてて給食当番がみんなのものから少しずつとっていた時、石川君が自分のを半分も分けてやった。ぼくは、石川君もいいところがあるなと思った。（6月10日）

〈子どもたちは、バズ学習をどうみているか〉

―――アンケート調査より―――

● あなたは、班をつかっての学級づくり、勉強をどう思いますか。

↓

- わりといいと思う。男子ばかりとか、女子ばかりのグループもなくてみんなが協力している。
- 班を作ると、わからないことを教えあったりできるし、係活動も協力してできるから6年生になってもやりたい。
- 授業でわからなかった人に教えてあげるのはいいけど、その人に話す時の口調をもう少しやさしくしたらと思う時がある。
- わからないことを教えてくれるからやる気が出る。

2、まとめ

昨年転校してきて、友達がいなくひとりポツンとしていた川口さんが、1学期末の「お楽しみ会」の飾りつけを係の仲間とともにやっていた。先生！「このクラスで一番かわったね！　明るくなった。」という声を聞く。「よかった！一人でもよくなった子がいて」

昨年度は子どもの無邪気さ・明るさに支えられ、今年度は子どもの謙虚さにはげまされて本校の現職教育テーマ「人間関係を高めつつ基礎学力をつけよう」に取り組んでいる。

毎年、学級づくりのさわりまで実践は進むのだが、今年こそ「授業が学級をつくり、子どもを育てる」実践の理論と、何より2学期の学級づくりのエネルギーを吸収していきたい。

第３分科会　　基礎講座

研究主題　自主性を育てるバズ学習

新潟市立曽野木小学校　土屋邦雄

5

要　旨　1. 教師の集団化を図り、全教師が教科の壁を乗り越えなければならない。
　　2. バズ学習の方式やルールは、本質的なものである。
　　3. 復習バズは、学習と生活の統合の場として一日の時程には欠かせない。

研究内容

Ⅰ　なぜバズ学習に取り組んだのか

1. 生徒に対する疑問

(1) 学習面……自主性に欠け、無気力で問題意識に乏しく、温順で消極的依存的である。

(2) 運動面……生徒の自信回復のため課外の運動部活動に力を入れた結果、昭和41年に野球部が県大会優勝の快挙を成した。このころから放課を待ち切れぬという状況で各運動部は自主的に協力し統制のある練習に励むようになった。

(3) アンバランスへの疑問……「課外に燃やす情熱があれだけあるのに、そのエネルギーがどうして授業になると消滅するのか」全教師に共通した疑問であった。学習規律の徹底を求めたり、教育相談による個別指導も試みたが、期待するほどの変容は得られなかった。疑問は一層深くなった。

2. バズ学習へのスタート

私たちは、運動部活動に示す活力を、どうしても学習面にも発揮させたかった。「どうすれば本気で学習に取り組む生徒にできるか」これがいわば第１次共通課題であった。ところが、この課題解決のためには、学習以前の問題を解決しなければならないという見解が強く主張された。つまり「基本的生活習慣を身につける」ことが先だというのである。これが第２次共通課題となった。私たちは二者択一の道を選ぶ余裕が無かった。この両者を統一し同時達成の道を求めた。

バズ学習に取り組んだ理由は、第１は生徒の持つ問題点を全教師が等しく把握したことである。第２は、個々の教師が（口には出さなかったが）今までの自己の授業の構えでは学習効果があがらないという事態に全員が立たされていたことである。第３は、直面した「基本的生活習慣」と「学習指導」を統一して同時達成をしようとしたことである。

Ⅱ　教師の集団化と基本的な構えの確認

私たちは、先進校に積極的に学び、よいと思ったことは直ちに実践し、その後議論することにした。そして私たちは、学習指導のいわば質的転換を自らに課すこととした。

1. 学級を集団として把握する

学習の成立はいうまでもなく個々に成立するものであるが、集団状況で学習している限り、学級が望ましい学習集団であるか否かは個々の学習成果に影響する。学級を単に個の

集合体と見ない。競争原理を努めて排し、学級成員の人間関係を重視し、協力・教え合い・助け合い・確かめ合いの相互交流活動を最大限に展開する。

2. 学習の主体を子どもに移す

自主性の育成を私たちはめざしていた。何をどうすることが、「子どもが自主的に意欲と行動力を身に培っていくことになるのか」を追求することとした。授業では、個々の子どもがどのように思考し創造したかを評価する必要がある。そういう授業を展開するには、教師が変わらなくては不可能だ。まず教師中心の一方的な「させる授業」を止め、教える教師から育てる教師に脱皮する必要がある。教科学習はもちろん、全教育諸活動の指導において教師はスターではなく、子どもがオールスターなのだと確認し合った。

3. 生徒を変革する教師集団をめざす

私たちは生徒が全力をあげて学習することを教え、協同して学習集団を築く指導をすることに決定した。その実践のためには、教師自身が相互の人間関係と信頼を深め、協力の喜びを味わい、集団思考を体得する必要があること、教師集団を互いの努力で意図的に強化すること等が確認された。

ところが実践となると、個々の教師の教育への構え、人格、経験、特質、方法論等から、当然多様性が出てくる。重要なことは、これらの共通認識がどれだけ広がり深まるかである。私たちはそれを次のようにおさえて共通した指導法を実践しようとした。

(1) 学校の課題と地区（校区）の課題　(2) バズ学習の求める人間像
(3) 生徒の理解　(4) バズ学習の方法論

ところが、バズ方式の学習展開には大きな抵抗があった。校長以下11人の小規模校で、一人二教科という状況にあったことと、何よりも授業の変質であることから、教科目標に固執してしまった。私たち教師にはまことに厳しい事態でもあった。そこで裸のつき合いをすることにした。互いに教生にもどることにして授業交換をした。そして授業→討論→授業を繰り返した。この過程で相互に励まし合いながら脱皮しようとした。やがてこの苦労は必然的に教師間の相互理解を深め、自分の空き時間にどの教室へ参観に行っても支障がないほど授業交流は容易になった。

4. 地域ぐるみの教育をめざす

生徒は学習場面での活動に変動に変容を示しながらも、日常の生活態度・行動面ではまだ変わって来なかった。家庭が変わらなければ、そして地域の教育力が出て来なければ、その地域の子どもたちの生活態度は変わるはずがない。学校・家庭・地域の連携ができるように、地域ぐるみの教育態勢づくりの必要を私たちは痛切に感じていた。そのために地域バズが極めて有効であることを確認した。

Ⅲ　各教科における実践

1. 学習指導の転換

自主的・積極的に学習する生徒、自主的に協力して成長する学習集団を私たちはめざした。今までの一斉学習を放棄して、バズ学習の基本的な性格、つまり「学力と人間関係の統合」「個人学習と集団学習の統合」「個人の発達と集団の成長」が具体化するよう全教科で実

践に取り組んだ。（授業のいわば質的転換であるから前項で述べたような困難があった。）

(1) 指導案を変えた……全教科の指導にバズ学習のねらう認知目標（知識・理解・技能・能力）と態度目標（学習に対する態度・教師や仲間に対する対人態度・協力性や自主性や積極性などの社会的態度）の二目標を設定し、同時達成を図ることとした。

(2) 学習の流れを変えた……従来形の一問一答方式の問答授業を止めて、課題解決学習にした。このためレディネスを重視し、主体化をねらって個人学習の時間を保障した。当時私たちは資料A（別紙）のような学習展開に努めた。（現在は単元単位のバズ学習指導の一般モデルがある。）

2. 課　題

準備課題……中心課題に対するレディネスをねらいとする。

中心課題……学習のねらいを達成するために、その内容を分析して生徒の思考の場までおろしたもので、生徒が自ら解決する問題として追求するものである。
望ましい課題―①生徒の興味を喚起するようなもの　②新しい（高度な）段階へと発展していくようなもの　③限られた時間内にまとめられるようなもの　④ほとんどの生徒が解決の糸口をつかみ得るようなもの　⑤テキストや資料・実験・実施等で解決が可能なもの　⑥教科の指導目標達成に迫るもの　⑦適当な困難度を持つもの

確認課題……今までに学習したことを確認したり、応用したり、練習したり、要約したりする等の活動内容の課題

3. 「バズ学習の基本」　――本質と学習訓練――

認知目標（教科目標）と態度目標の同時達成を果し得るか否かは、この「バズ学習の基本」をどれだけ生徒が理解し実行するかにゆだねられていると言える。

最初の３項目は、学習集団の規範となるものである。次の５項目は単に話し合いのルールというだけのものではない。１は、主体の確立であり、２は人間信頼、３は友情と連帯、４は謙虚さであり、科学的検証的態度であり、社会への貢献であり、真理への畏敬である。５はそれらを通して集団とともに自己の確立を意味するものである。

教科目標追求の学習活動が充実すればするほど、子どもたちの人間形成も同時に充実していく。つまり、認知目標と態度目標の同時達成というバズ学習の本質的なねらいを具体化したものがこの「バズ学習の基本」である。

- 始業の合図で学習を始める。
- 必要以外のことは話さない。
- 「やめ」の合図で前を向く。

1. まず考える。
2. わからないことは聞く。
3. 聞かれたら教える。
4. 進んで発表し合う。
5. そしてまとめる。

4. 班の編成

学習集団をめざし、学級内の人間関係を高めること。学習効率を高めること。この二つの観点から編成する。（班内異質・各班間同質）

(1) 人数……男女各３人、計６人班を原則とする。

(2) 編成の方法……必ず男女混合とする。（保健体育と技術家庭科は例外）可能な限り男女各３人とする。座席は男女を交互に組み合わせるようにする。（資料C参照）

(3) 組み替えの期間……学級の実態により、若干異るけれども、短かくても1か月、長くても2か月がよい。各学期2～3回が望ましい。長過ぎても短か過ぎても、学習集団の基盤となる人間関係の深まりを妨げる。

(4) バズノート（班日記）……班活動を促進し、成員の相互理解を深めるために、班一冊のノートに班員が輪番交替で書く。主としてその日の学校生活の中から気付いたり考えたりしたことを書き、お互いの理解や共感をしたり、時には討論するなど、班内の人間関係改善の効果が大きい。

5. 話し合いの方法

「話し合いなさい」だけではバズ学習にならない。大切なことは、学習の流れのどこで、どのように（どの形）話し合わせたら効果的かということである。指導段階による分類もあるが、教師がマスターするまでは、形式によるバズ法の訓練を随所でとり入れることから始めた。

① 二人バズ（対人法・隣接法）……向い合った二人または隣り合った二人のバズで、ドリルや復習に多く用いる。

② 順バズ（輪番法）……班内で順番に答えたり出題させたりする方法。
特定の生徒に発言を独占させないという利点、順番だからということで気おくれしている生徒の心の負担を軽減する利点などがある。特に能力の低い生徒には、班内の全員が援助するような配慮の指導が大切である。

③ フリーバズ（自由会話法）……班内の場合と学級全体の場合がある。いずれも話し合いのルールを守った上で、誰もが自由に発言できる。「指名なき発言」による集団思考も高度なフリーバズである。

④ 質問バズ（テスト法）……一人が問題を出し、他の成員が順バズやフリーバズで答える方法である。出題者を輪番制にするとよい。出題することによって理解が深まる。

Ⅳ 教科からの拡大

「教科の壁」を破り、一応全教科でバズ学習が進められるようになったころ（第2年次の3学期）学校生活と家庭生活の接点として復習バズを4月から実施することとした。

1. 復習バズ――目標・学習の理解を深めること・家庭学習のまとめ方を明確にすること。
・厳しさと暖かさのある生活態度を形成すること。

次の効果をねらって火曜日（クラブの日）土曜日以外の日の第7限に40分間設定した。

(1) 一日の学習内容の理解と定着　(2) 家庭学習へのつながり
(3) 学習方法の交流　(4) 一日の生活の反省
(5) 人間関係の高揚　(6) 担任教師の生徒理解の拡大
(7) バズ学習法の定着

2. 特別活動・道徳　――略――

Ⅴ 地域バズへの発展　――資料F参照――

Ⅵ 生徒の変容（評価）――資料G参照――

第3分科会 基礎講座

研究主題 「中学・高校のバズ学習 ― 教科指導からのスタート」

岐阜県土岐市立泉中学校　水野 せつ子

6

▶ 私は今1年生を担当しています。今年の1年生のバズ学習に対する反応を調べてみました。

61・6・6 ―― 1年D組　41人のアンケートより

バズ学習について あなたは → 良い。良かった。 } 40人
→ 意味がわからん　1人

〈良いと思うところ〉

- わからないところが解決できる。なぜまちがっていたかがわかる。
- 仲間の考え方との比較ができる。そして更に新しい考えが生まれる。
- グループの子と仲良くできる。協力して ていねいに教え合うことができる。みんなでできるし、おもしろい。
- 家庭学習に役に立つ。
- 発表回数がふえる。自分の意見がグループの中で言えるようになった。
- まとめることが早くなった。能率が良い。

〈問題になるところ〉

- バズ体形になると、すぐにいらぬことをしゃべったり あそんだりする。
- 時間が足りないことがある。もう少し時間が欲しい。
- 時々全員がわからないことがあったり理解できないこともあって困る。
- 話が進まずなかなかまとまらないことがある。

▶ 私たちの学校は全校体制で行っています。学校教育目標実現のための具体的方途にしています。

- 教育目標 ―― 実力のある 民主的実践人の育成

確かな学力
豊かな人間性
逞しい心身

三作り精神
- 協同の目標をめざすことができる（めあて作り）
- 自分を高めることができる（自分作り）
- 集団を高めあうことができる（仲間作り）

- 基本組織 —— 実践する場として学習・生活・健康の面を考え、校内組織（職員会や生徒会）やP.T.Aの組織も学習部、生活部、健康部の三部制をとっている。

- 具体的方途としてのバズ学習 ——
  学習・生活・健康のそれぞれの場においてグループごとに、このことについて（めあて作り）私はこう思います（自分作り）あなたはどう思いますか（仲間作り）そして、それではこうしましょう。（第2次のめあて作りへ）

- 新任職員への指導 —— 4月当初に新任研修を行う。
  自主活動 —— 毎月1回読書会をもつ。

- 生徒会活動による指導 —— 執行部による各学級の研バズ実施。

〈指導の視点〉
種類、方法、ねらい、バズポイントの検討
リーダーやメンバーの指導など。

- バズ小委員会の年間計画による指導 —— 特に初期指導の徹底をはかる。
  全校職員研バズの実施

- 教科部会では —— 単位時間内のバズの位置づけの検討。
  教科係、学習リーダーの指導。
  学バズポイントの出し方について。

▶ そして学年会では次のようにしています。

- 入学式当日父兄に説明
- 学担によるバズ学習についての導入指導 —— 「学校生活の手引き」
  学級内研バズの実施

学年会
学級担任 } 子どもの実態の把握 —— 生徒指導
学年経営
学級経営 —— 道徳・学指 → グループづくり

生活グループを編成し、学習の場にも利用している。

▶ 私は社会科を担当していますが、そこで試みていることです。

チャイム ⟶ 教科係4名のうち、2名は職員室に連絡
他の2名が「起立。礼。着席」（休み時間に）
「バズ体形になって下さい。」
（ベルタイマーを3分間セットする。）

各グループの学習リーダー ⟶ 「持ち物忘れありませんか。」
「予課の取り組みはできましたか。」
「前時の復習でわからないことはありませんか。」

教科係（司会と書記）⟶ 「予課発表をして下さい。」
（3分間に10人位の発表をめざす。
バスケット方式。
発言のルールや返事の指導など。
司会のしかた、黒板の書き方指導）

〈授業の流れ〉

	予課発表の過程	課題づくりの過程	追究の過程	視野の拡大深化の過程	終末の整理・予課づくりの過程
教師の意図	それまでの学習をふりかえらせ、一人ひとりがどのように学習を理解しているか、どのような疑問を持っているか、見きわめる。	生徒の心にふれるより新鮮な資料を提示し、生徒にとって切実感のある課題を生み出す。	課題に対して一人ひとりの見方・考え方をはっきり持たせ、鍛える。ずれを明確にしたり、対立を組織する。	その時代、その地域その社会に生きた(る)人々の願いやかなしさよろこびにふれる資料を見つめさせ、つきつめさせる。	学習をふりかえらせ学習成果を見つめさせるとともに、また新たな課題意識をふくらませる。
・活動	設定する活動 ・前時の「感想」発表 自己評価	・資料①・発問	・活動の設定・組織	・資料②・発問	・資料③・発問・活動
○生徒の高まりの姿	生徒 ・ノートを見ながらそれまでの学習をふりかえる。 ○前時の学習、自分なりに考えたことを想起し、進んで発表しようとしたか。 （「あのこと、よくわかったな！」「でも、わからないこともあるぞ！」）	・それまでの学習とつなげて考え、第一義的に感じたことをメモする。 ○興味・関心を持ち、やってみたい意欲が持てたか。 ○課題解決の意欲が持てたか。 （「今まで考えていた以上だぞ！」「今までの見方・考え方ではとらえられないぞ！」）	・調べ考えたり、バズして考える。 仲間の発言や活動を含め、考える。 ○自分の力を注いで追究できたか。 ○仲間とともに見方・考え方を広げたり深めたりできたか。 （「もっと別の本当の理由がありそうだ！」「自分の考えとちがうぞ！」「あんな見方・考え方があるのか！」）	・これまでの学習とつなげ、つきつめ、真実に迫ろうとする。 ○学習してきた内容を理解し、見方・考え方を拡げたり深めたりできたか。 （「なるほど、そうか、そんな見方・考え方があるのか！」「自分にはああいう見方・考え方はなかったな！」）	・学習活動をふりかえり、学習成果を見直し、課題意識が持てるようにノートにまとめる。 ○解決の成就感は持てたか。 ○学習のし方がつかめたか。 ○学習成果をもとに次への課題意識は持てたか。 （「そうか、そういうことなのだ！」「これはどういうことなのだろう?!」）

社会科としては、授業の中心になる追究の過程にバズを設定するようにしていますが、（この場合、探究バズになり、輪番法になります。）課題づくりの

過程や視野の拡大深化の過程にバズタイムを設定することもありますからその折々にバズの種類．方法．めあて．学習リーダーの司会の進め方など説明していくことにしている．

授業の終末に → 教科担任が全員にわかるように学バズポイントを提示する．（理解バズ＝おぼえる．まとめる．練習する　輪番法かリーダー法になる．大体5分位の程度の内容にする）
特に学習リーダーや教科係にわかるようにする．
↓ 時間不足の時には教科係に連絡する．

▶ 生徒たちが問題点として指摘していることは私たちとして確かに受け止めねばならぬことだと考えています。

設問の内容．質の検討．　グループ編成にかかわる問題．

▶ 今．試みてみたい方に ―――― 教科内バズの試み

1. 自分の学級をよく観察してなるべく差のないグループ編成をする。
   学力．人間関係など
   4人～(5人)．男女
2. 学習リーダーを決めさせる．（班長が兼任してもよいでしょう．）
3. バズ学習の意味やねらいをよくわかるように説明する．
   学習がわかる．仲間づくりができる．
   確実になる
4. バズの種類．方法．ねらいを説明する．
5. 学習リーダー（班長）の指導をする．
   司会のしかたなど．
6. 学級内研バズを行って生徒と共に検討し改めるところは改めていく。

御質問とメモ

第４分科会　　中学・高校のバズ学習一生活指導からのスタート

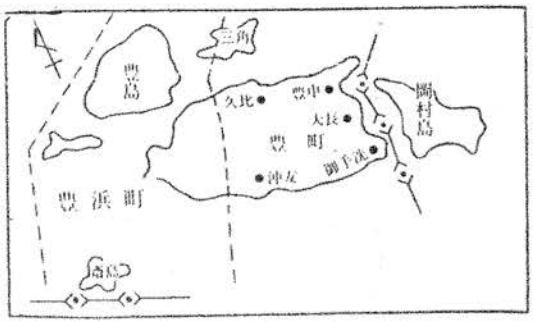
研究主題　　協同・創造活動を通して自主性を高める集団づくり

広島県豊田郡豊町立豊中学校　横手　茂

１、生徒をとりまく環境

１）、地域の実態

本校は、広島県の最南端に位置している大崎下島の中部を占め、本町に大小五つの島を抱え、総面積１４、１８平方キロメートルあり、地形は急斜で平担地が少なく、「耕して天に至る」と言われるごとく特産のミカン畑として開こんされている。



職業分布は、ミカン　培が主であるが、ここ数年来のミカンの不況により出稼ぎ、過疎化が急増している。

２）、学校

本校には、豊小学校（１３０）、久比小学校（５９）、沖友小学校（１８）より入学してくる。

進学者の２０％は本町にある豊高校に進学していくが、他の生徒は上島及び、呉、広島方面の高校に進学していく。

２、生徒指導について

１）、本校生徒の実態

本校の生徒は比較的おとなしく、消極的でやや気迫にかけている、また、最近どこの生徒にもみられる一般的傾向かもしれないが、本校の生徒の中にも苦しさに耐える気力のない生徒が増えつつあるように思われる。今のところ校内暴力、授業妨害等は起っていない、しかし、非行の芽は全くないわけでもない。

２）、指導を進めるにあたって

生徒指導を進めるにあたって、その基本は、生徒理解である、「理解の過程」こそ生徒指導である。生徒の日常の生活を中心に可能なかぎり理解のための実践に努めている。

部活動、ＨＲ、３０分学活、生徒会行事、教育相談、事例

研究会等の諸活動を通して生徒との心の触れあいの場面を多くもち、共に生きるという姿勢の中で生徒の心情や願い、不満に目をむけ生徒の課題を見い出し、その解決に取り組んでいる。

３）、本校の生徒指導の目標

「集団の質的向上と自主性の育成」

豊かで楽しい学校生活をおくるために

１、わかる授業（バズ学習）を創造し、生徒が授業に参加できるよう配慮する。

２、生徒の活動の場をひろげる。特に部活の充実、学級や生徒会による学校行事への積極的参加などを通して個性を伸ばし充実感をあじわせる。

３、生徒理解と教育相談の充実。

４）、生徒が主体的に参加する授業の確立

本校においては、教科指導において、「バズ学習一単元見通し学習法」を生徒に定着させ、生徒と生徒、生徒と教師が互いに認め合うという人間関係を大切にしながら認知目標と態度目標の同時達成を狙い、個人的に、あるいは集団の中で自から主体的に自己実現を図ることにより、すべての生徒がいきいきと参加できる授業を確立することに努力している。

５）、連帯と規律ある集団の育成

すべての生徒がいきいきと参加できる授業を確立する一方、生徒に社会生活を営むうえでのマナーとして基本的な生活規律を身につけさせる。

６）、家庭と地域社会との連携

より効果的な指導を進めるため信頼関係を基盤に、家庭や地域社会と密接な関係をもつなかで相互に連携情報交換を行っている。　ＰＴＡ会・家庭訪問・地域懇談会・学級通信・ＰＴＡ生徒指導委員会・豊高校区教育推進連絡協議会など。

３、生徒会活動

生徒にとって学校生活は、生徒たちを包合する生活の中でも大きなウェートをしめている。授業を中心とする教科学習の場、そして、クラブ・部活動を中心として上級生、下級生のつながりがあり、交遊関係、人間関係の形成の場である。

１）、生徒朝会

本校の特色は、クラスで話し合ったこと（時には個人）の発表の場になる。全校２０７名の前に１人で立ち発表するの

は、中学生活の中でも少なく貴重な体験である。発表内容には、（１）、より学習を充実するためには、（２）、人権学習、（３）、身のまわりの問題について、（４）、服装・そうじ等学校生活全般についての問題をとりあげている。

２）、生徒総会

事前の各種委員会、予算委員会、クラス討議をもとに生徒総会が行なわれる。主として、活動目標、計画と予算が中心課題であったが、本年度は学校のきまりを議題にとりあげ、生徒相互で確認された。毎年運営が円滑に進みすぎる傾向があり、盛り上がりに欠けるようであったが、本年度は、予定の時間をオーバするほど活発であった。

３）、球技大会

球技を通じ技能の向上をはかり同時にクラスの連帯を深める。

４）、写生大会　５）、学校祭　６）、予せん会

４、　単元見通し学習について

学習者に課題意識をもたせて、自主的に取り組ませ、仲間と協力してより豊かな学習を行なわせようとするのがこの学習法である。ただ１時間ごとの授業にぼ没することなく、１単元全体の中の１時間としてとらえ、生徒に学習課題をとらえさせることを目標にしている。生徒にこれから何を学ぶのか、その概要をつかませる必要がある。

単元見通し学習法を実践するために次のような手だてがいる。

（１）、単元の学習内容を課題計画表で構造的に提示することによって理解させる。

（２）、プリテストを実施することによって学習課題を把握させ同時に問題意識をもたせる。

（３）、単元内容に応じて授業の中に学習課題を提示し、教師の適切な援助のもとで個人で、または班バズで学習を進めていく。

（４）、プリテストで提示された課題は各学習時間の中心課題として位置づけて取り組ませると共に時間的余裕等を見積って、ドリル的なもの、応用的なものを提示していく

（５）、単元の終了した時点で、教師は学習に対する総括者の立場として、各時間でおさえた重点事項を取り上げ、単元全体の整理、まとめをすべきである。

（６）、単元の学習全般にわたる到達状態を知るために、プリテストを利用したポストテストを実施する

（７）、ポストテストの結果をもとに生徒は自己評価を行ない、そこから自己課題をもたせ、さらに教師は理解度の低い事柄に対しての補充・強化に努めなければならない。

５、３０分学活について

ア）、ねらい

１、自主、協同、創造の態度や能力をつちかい、問題解決の能力と態度をみがく。

２、集団に所属し、集団の一員としての役割を果していく力を養う。

３、授業の中でのバズ学習がスムーズに進むための訓練の場である。

イ）、活動目標

１、班活動における問題点をみんなで解決していく。

２、教科でわからないところをなくする。

○わからないところを出し合い（自主）

○ねり合い（協同）

○確かなものにし、理解を深め高めていく（創造）

第４分科会　　基礎講座

研究主題　小集団を基盤とした学級経営を通して、個をいかに変容させるか
＝＝＝班ノート指導を中心とした取組み＝＝＝

愛知県春日井市立鷹来中学校　古賀直人

8

要旨

［荒れる中学校］そのものであった本校に新任として赴任して以来、３年間は何をやっていけばよいのか、わからぬままに過ぎてしまった。少数の生徒の問題行動の処理に明け暮れる毎日で、大多数の生徒たちに教師として何を与えてきたか．．．思えば申し訳なさと恥ずかしさが残っているばかりである。たしかに大きな嵐は去った。しかし、その時から学級経営で自分自身にしっかりとした柱を持ち、二度と同じ間違いを繰り返さないようにしたいと考えた。本校が本格的にバズ学習に取り組んだのが５年前。校内現職教育でも［どうしたら参加度を高めることができるか。］［よりわかりやすい授業の成立をめざして］などを検討してきたが、実際に学級へ持ち帰ったときに今一歩、効果が現れてこない。どうも形ばかりに追われて、バズ学習の根本的原理である｛人間関係を基盤として．．．｝という最も大切なところが育っていなかったようである。そこで、望ましい人間関係の育成をめざす取組みとして次のような実践を展開した。

１．小集団を基盤とする学級経営
２．生徒一人ひとりを、また学級、小集団をよりよく理解するための活動

＊１．を実現するために２．はどうしても必要だと考えた。

研究内容

１．小集団を基盤とする学級経営

望ましい人間関係を育成するために、どの学級においても小集団活動を取り入れた学級経営に取り組んでいる。

１年時での取組み

学年では

・入学式
↓
・合宿訓練　・小集団学習の意義
　　・話し方、聞き方、司会のしかたの練習
　　・班ノートについて
↓

１の８では

・学級開き
集団を充分に意識しての抱負を語る。
↓

・学校生活の中で

・ＳＴでの生活反省、助け合い学習（練習の場）
・授業に意図的に班活動を取り入れる（実践の場）
・リーダー養成
学年生徒会（クラスの級長副級長の集まり。学年の行事や諸問題の解決を委員会とタイアップして計画、立案、実行していく。）
・他のクラスから学ぼう
ＳＴの公開、係活動

・係活動の充実（班単位で学級の仕事を受け持っている。）
・掲示物コンクール
・班ノート
・清掃、給食活動に力点を置いて

２年時での取組み

学年では

・学級編成（学力、人間関係、リーダー等を充分考慮して）

２の８では

・学級開き（担任の学級作りでの願い）

いよいよ２年生としてスタートしたわけだが、どうしても１年生の時の友達づきあいで動きやすいために、すぐ班を作ることはせずにもう一度１年生で行ったようなオリエンテーション（小集団の意義）を、生徒の経験を語らせながら進めていく。［担任の観察、生徒の心構えの期間］

・１年時からの取組みの継続、発展
・リーダー養成
野外学習実行委員会
・１班１鉢運動

・班作り
・班ノート
・学級のルール
・清掃、給食活動重視

現在に至る

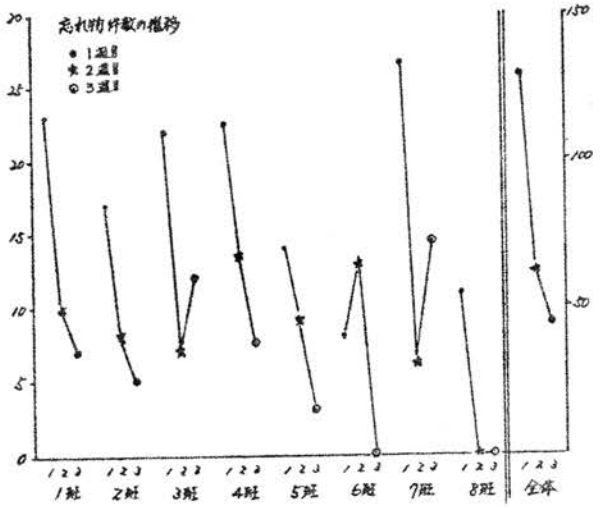
現在２の８で取り組んでいる班活動の一例：忘れものゼロ作戦

取組みの過程

・忘れものが多く授業に支障がでる。⟶・教師の叱責⟶・生徒たちだけによる話し合い（決裂）⟶・学級会（班で取組みを考えよう。）⟶・班毎に決定事項を自分たちの一番見易いところに掲示⟶・担任が評価表を作製し、ＳＴ時に忘れもの調べを実施⟶・週に一度集計し、自分たちの努力を振り返る。⟶・新聞係による報告。

・ここで大切にしたことは、自分たちで決めたことは自分たちの責任で守ろうとすることである。

その効果



・集団の高まりとともに、個人の高まりに注目して見ると．．．

谷口君の場合（評価表や班ノート）

第１週：１３個

班員からきちんと取組みをやれよとか、いいかげんにしろ！

第２週：４個

あんまりひどすぎると、自分にとって損かな。（本人）

第３週：４個

やっと班でゼロの日が来た。でも次の日には谷口君がダメだった。

・自分は最近忘れものが一つぐらいになってきた。でも、そんなこと喜んではいられないな。（本人）

第４週：２個（途中）

・今日は班で忘れものが２つもあった。明日は絶対ゼロにするからね。（本人）

大切なこと

自分たちにとって今何が必要なのか、考え行動する。

教師は生徒の活動を後ろから支えてあげれるような存在でいられたらなあ。

２．生徒一人ひとりを、また学級、小集団をよりよく理解するための活動。

ア．教育相談
イ．記録ノート（個人の記録や日記）
ウ．会食
エ．係活動のお付き合い
オ．日曜出勤
カ．班ノート
・
・

担任によって、どこに力点を置くかは異なっている。

私は班ノートを２．の目標に迫る手段として最も注目している。以下はその実践の報告である。資料参照

○１年生の時からの指導

・１ページは必ず書くように努力をしよう。
・事実だけでなく、自分の考え、対策、実践を書こう。
・班や学級に関することを書こう。
・自分の行動や態度に対する反省や感想を書こう。
・友達から学んだこと、友達への忠告を素直に書こう。
・先生に対してより、仲間に向かって書こう。
・真面目な態度で書こう。
＊輪番で、毎日家庭に持ち帰り書く。翌日、教卓の上にＳＴまでにのせておく。

○１年生への指導を振り返って

１年生は新鮮な気持ちで、中学校生活に大いに期待している。早ければ早いほどいろいろな指導が入りやすい。班ノートも同様である。

教師が朱書きを入れるときに、できるだけその話題や問題を班へ投げ返すような書き方をする。生徒は驚くほど前の生徒の記事や教師の朱書きを読んでいる。そのうち班ノートが各班で一人歩きをしだし教師はそれを垣間見るというふうになれば成功だ。そうなると、自分たちのノートだという意識が強まり、活発な意見がでやすくなる。

［バズ学習の理論と実際］を参考に、全くの真似で始めた取組みであるが、実践していくうちに次のような工夫を試みた。

ア．忙しくとも必ず給食までには朱書きをいれて、会食の前に班を周りながら返す。教師も班で食事を取るのでノートのことが話題にしやすいし、なりやすい。どうしても時間がないときは、見たよとだけ書いたり、放課に声をかけたりする。
イ．これはと思う内容については、ＳＴや給食のときに全生徒に読んで聞かせる。・・・次の班ノートへ感想が出る。
ウ．学級掲示に”班ノートから”というコーナーを設ける。・・・他の班のノートに影響する。
エ．時々ノートを交換して他の班のものにふれる。・・・書き方を学んだり、多くの仲間の意見、考え方にふれることができる。
オ．学級の諸問題に関することで、各班から同じような内容が出始めたら、学級の時間で取り上げる。・・・班ノートは班で話しあったことの記録ノートとして使われる。
カ．道徳の時間の感想や意見を求める。［次の人、今日の道徳について書いてごらん］　いじめを取り上げたときは、小学校にまでさかのぼる内容になったり、ほとんどの生徒がそのことについて

書くといった具合いに発展した。・・・次の学級指導や道徳につながる。

キ．時間があれば、数ページにわたって教師の思いや考えを書く。
・・・生徒の驚き

ク．ノートが終了したら、学級文庫の中に保存し、いつでも誰でも読めるようにする。

○２年生での指導

・教師の基本的な構えは変えない。
・１年の時の取組みが、クラスによって違うので事前の指導が必要。
・できるだけ早くペースにのせないと、個人ノートとして流れる。

○新たに工夫している点

ア．新聞係を使って、良い記事を発表させている。

イ．書くことに慣れていない生徒には、枠を書いてあげる。
ここまでがんばってごらん・・・効果抜群

ウ．班で個人名をあげて批判する記事が出たら、その生徒たちに意見を求め、最後にもう一度批判をした生徒に戻す。自分の考えに偏ったところはなかったか。・・・冷静な判断に役立つ。

○班ノートにみる生徒の変容例　資料参照

Ａ．授業態度を変えようと試みる生徒

Ｂ．問題生徒との関わりで自らが大きく成長する生徒

＝＝＝＝まとめ＝＝＝＝ 班ノートによって

・学級、班、個人を知るてだてになる。
・やる気や抑制力を高める。
・言葉が残るので、次のステップへの糧となる。
・生徒の変容する貴重な記録である。

私たちはただひとつの方法で生徒を理解しようとしているのではない生徒は教師の存在以上に生徒同士の関係で影響しあい、その態度を変えていく。さまざまな力を生徒がどう受け止めているのか。班ノートはその集約の場である。教師が何を意識しているかによってノートの方向性が決定されるが、そのことは生徒が教師を知ることになると言ってよいのではなかろうか。

判断が行動に移りにくいという最も大きな課題がいつでもついてくるが、これからも一人ひとりの生徒をよりよく知って、その生徒の正しい判断を認めることによって少しでも実践できるように導きたい。

相互作用を生かし、参加度を高める学習指導
―――― 校内現職教育をとおして ――――

愛知県春日井市立中部中学校　寺　井　正　輝

9

１、はじめに

本校は、春日井市の中心部に位置し、国鉄中央線・国道19号線に隣接している。開校以来、本年度で40周年を迎え伝統校としての気風が、教師にも生徒にも感じられる。教職員数70名・生徒数1745人で、42学級と屈指のマンモス校であるが、「知・徳・体」の調和にたった教育を強力に進めている。特に昭和60年度より「バズ学習」を現職教育の柱に研究を進めている。

２、本校の研究歴

昭和54・55年度　「自ら意欲的に取り組み、お互いに伸びようとする生き生きとした学級づくりの研究」
昭和56・57年度　「各教科に即した観点別到達度評価の実際」
昭和58・59年度　「形成的評価結果をフィードバックさせた授業の展開」
　　「所属集団の中における存在感の育成」
昭和60年度　「相互作用を生かし、参加度を高める学習指導」

３、本校の教育目標

（１）本校の教育目標

ア．校　訓

○健康明朗　　○知性錬磨　　○協力奉仕

イ．具体化のねらい

○ひたむきな心で
- ・たくましく生きぬく力を身につけよう。
- ・自ら学び、互いに磨き合い、高め合おう。
- ・よく働き、進んで協力奉仕に努めよう。

――――――○心豊かな中学生になろう。

（２）経営方針

ア．教師相互の信頼と協力による全校体制のもとで、生徒にとってうるおいと喜びのある学校の実現を期する。
イ．充実した学校生活の中で師弟同行、実践力のある生徒の育成に努める。
ウ．ひとりひとりの生徒理解に努め、生徒に自己実現の場を与えるとともに生徒指導の充実徹底を期する。
エ．教師としての使命感に燃え、常に研修に励み指導力の向上に努める。

4、校内現職教育計画

(1) 現職教育研究テーマの設定

現職教育は、教育目標具現化の方途の軸といえる。本校では、従来より行われている一斉授業を謙虚に反省し、教育活動の中で教師と生徒・生徒と生徒同士の相互作用を基盤とし、お互に「磨きあい、響きあう」ことにより一層の学習効果の向上をはかることをねらいとしテーマ設定をした。

(2) 実施計画

	具体的計画
一学期	具体的実施計画の作成 教科・道徳・特活等の年間計画の作成 各教科の授業研究と教科部会 学年別研究会（道徳・学級会） 事例研究会（登校拒否）
二学期	各教科の授業研究と教科部会 学年別研究会（学級会・学級の時間・道徳２回） 事例研究（いじめ） ２学期の実践のまとめと分析
三学期	各教科の授業研究と教科部会 学年別研究会（学級会） 事例研究（問題行動） 本年度のまとめ、反省、来年度の方向 研究紀要の発刊

◎ 教科の授業研究については、全職員１回以上実施する。
◎ 道徳の授業研究については、１回に学年３～４名が実施し、小グループで研究協議し成果をまとめる。
◎ 学活については、モデル学級を指定し学年全員参加の研究協議会を設定する。
◎ 生徒指導については、事例研究会を学年・全体で実施する。

《 授業研究計画 》

	国	社	数	理	音	美	体	技家	英	道徳	学活
4	西村	◎年間計画立案、研究準備							津田		
5	田中由	加藤		沢木	伊藤 塘廼		原田 小森	田中	久木田		
6	渡辺	鈴木一	林 山内	中田 片山	奥村	森	野口 木塚	鈴木直	桑原 林真	全	
7		藤田	伊藤 影	右高				小林	川越		３年
8	◎１学期のまとめ、教材研究、フィールドワーク										
9	中山	鈴木 收	伊藤 後藤		塘廼	森脇			久木田		
10	本田 並木	田	野田 山内	長尾	久田	高島	村上	荻原乙	三宅		２年

《　各教科，領域の研究テーマ　》

教科等	研究テーマ
国語	参加度を高める国語科指導
社会	社会科における相互作用を生かし、参加度を高める学習指導
数学	相互活動と評価について
理科	相互作用を生かし、参加度を高める理科指導
音楽	相互評価を生かし、豊かな表現力を養う指導法の研究
美術	相互活動を生かした批評会の指導
保体	相互批正を生かした実技指導
技家	バズ学習を効果的にするための教材教具の開発
英語	英語科における相互作用を生かし、参加度を高める学習指導
道徳	お互いに価値観を高めあう道徳指導

取り組みの実際

（１）昭和６０年度の歩み

学級を連帯性のある学習集団に高めるために、バズ学習の初歩的基本的な事を学習体制のなかで一歩一歩積み重ねて来た。

特に、共通理解をはかることが校内現職教育の柱であった。全体会で基本線を提案し、学年会や教科部会を軸に具体化していった。

ア、現職教育で協議したこと

- ○　バズ学習の基本的な考え方
- ○　班の意義、班編成とその活用
- ○　話し合いのさせ方
- ○　授業の中でのバズの実際－－－授業法研究
- ○　短学活の運用

イ、学年での取り組み

（ア）バズ学習の基本的なルールの徹底

・ルールを指導し、基本を学級の前面に常掲する。
・話し合いの方法をくりかえし指導する。
・強調目標を掲げ徹底する。
・手引きによる指導
（活発に発言しよう。よく聞こう。班長の役割と司会）

（イ）相互交流

短学活を担任が交互に参観し、指導技術の向上とバズの基本の徹底をはかり、研究協議会を持った。

（ウ）学年、学級の核となるリーダーの育成

ウ、教科や道徳の授業の中での実践

（ア）授業研究実施計画により、全員が授業実践をした。研究協議の中で次の諸点を検討した。

- ・バズの場面設定は適切か
- ・相互活動は十分か
- ・評価は適切か
- ・課題は適切か
- ・参加度を高める工夫は十分か

（イ）指導案の形式の確立

エ、プロジェクトチームによる研究の活性化

個々の教師に共通の目的意識が出てきたが、底辺からの盛り上げにかけるという反省に立って、各学年からメンバーを選出し研究組織の改善をはかった。

（ア）短学活のプログラム作り

（イ）日課表の検討ーーー短学活の充実と生活バズ・復習バズの導入

（ウ）連絡黒板の設置

（エ）学習記録ノートの導入

（オ）学校行事の精選の検討

（カ）バズの手引書の編集

（２）昭和６１年度

ア、教科研究を充実する。ーーーー実践的なバズ研究

イ、バズを研究推進部会を組織し、充実させる。

ウ、バズの手引の活用をはかる。

エ、短学活を充実させる。

オ、資料の改訂をはかる。

学習ノート、学級日誌、生活ノート、バズの手引

カ、相互交流をはかる。

全学級をモデル学級と考え、教師・生徒相互の参観を実施し、検討を加える。

《　連絡黒板の活用　》

職員打ち合わせの時間短縮と生徒の活動を取り入れる意図で活用している。

（日課、各指導部の連絡、各学年連絡、委員会連絡、クラブ連絡その他の連絡等を記入）

《　短学活プログラム例　》

朝の短学活
8:10 ～　学習の諸準備
8:15 ～　挨拶、出欠席、健康観察、朝の連絡
8:20 ～　朝学習（教え合い、確かめ合い）
8:30 ～　班目標
8:35 ～　先生の話（生徒の心をゆさぶる話）
8:40 ～　挨拶　終了

帰りの短学活
3:45 ～　生活の反省
（１日の反省、家庭学習の計画、連絡）
3:55 ～　復習バズ
4:05 ～　先生の話（生徒の心に残る話）
4:10 ～　挨拶　終了

※　現在　水曜日を短学活指導日とし、朝の職員打ち合わせは行なっていない。

第5分科会　実践研究　社会科

研究主題　ふるさとを正しくみつめ、郷土白浜を愛する心を育てる社会科学習
―― 一人ひとりの探究心を育てる ――

兵庫県姫路市立白浜小学校　松井 郁

要旨　本校の児童たちは、浜手特有の淡白さを持ち、活発な反面、依頼心が強く、しかも、自己へのきびしさが乏しく短絡的な思考をすることが多い。従って、一つの事柄にとり組んで最後まで考えぬいたり、根気よく資料を集めて観察したり、自分の考えをつくり出したりすることができにくい。また、灘のけんか祭りの本場であるだけに、祭りに対する関心は強く、一年中、お祭りエネルギーで燃えているが、郷土の歴史や地場産業に目を向け関心を寄せる児童は少ない。

そこで、郷土の産業や歴史に目を向けさせ、観察・見学・調査などを通して、ふるさとを正しくみつめ、とらえなおし、認識をあらたにさせたいと考えた。

研究内容

1. 地域素材の調査と資料収集 …… マッチ工場　くさり工場　塩業
2. 学習指導資料の作成と教材開発 …… 児童の実態に則した適切な資料
   児童の実態を高めさす資料
3. 単元の構造化と授業研究
4. 力動的な探究学習方式 …… 原型に学びながら原型からの脱皮
   ―― 行動する社会科 ――
   - グループでの話し合い
   - 書くことの大切さ
   - 再現活動

指導計画（13時間）

A次

白浜の工場　2

〔白浜には、どんな工場があるだろう〕

〔マッチ、鎖・ナットなど鉄製品、かまぼこ、ライター等〕

（白浜には、マッチ工場、鎖工場、鉄製品を作る工場が多い。）

※　工場見学をしてみよう。

B次

くさり工場　8

〔イラストで工程を調べる。〕

〔工場見学〕

{鎖工場では、良い製品を作るため、どんな工夫をしているだろう。}

（生産工程……機械、設備
作業……組、安全
服装、設備）

（鎖工場では、良い製品を作るために、安全に気を使いながら、大きな機械を使いこなしている。）

{鎖をどこへ、どんな方法で送っているのだろう。}

（鎖工場は、製品の販売、輸送などで他地域と結びついている。）

C次

マッチ工場　2

{マッチはどのようにして作るのだろう。}

（原料、工程の工夫
製品の販売）

（マッチ工場では、いろいろな機械を使って分業や流れ作業で製品を作っている。また、原料や製品の輸送・販売などで、他の地域とも結びついている。）

白浜にある工場は、良い製品を安全に早く作るために工夫や努力を重ねている。また、原料の購入や製品の輸送を通して他の地域と結びついている。

D次

白浜の町と工場　1

{町に工場があって、どんな良いことと悪いことがあるだろう。}

（働く場所、くさい、やかましい
きたない水）

（白浜には工場が多く、働く場所も多いが、公害もあり、人々はその解決に努力している。）

〔展開の概要〕

(1) 具体的観察をもとに予想し、見学計画を立てる。

―本物（実物）の魅力――

〈鎖をどのようにしてつくるのか〉と聞えば、それなりの予想ができないことはないが、切実感や根拠の薄いものとなるであろう。

① 本物をさぐる …… 見る（形、大きさ） さわる（つるつる、ザラザラ）
持つ（量感）

② 鎖のつくり方を絵にかいて、説明を入れる。
○ 代表的なものを、TPに書かせ、説明する

ア. たいやきのように、型をつくって、そこへ鉄を入れて輪をつくる イ. 平べったい鉄の板を細く切り、何かの機械でまげる ウ. 丸い鉄をもってきて、片すずつまげる。少しだけ端をあけておき、ぬくめてつける。鎖は重いので、つりさげておく

③ グループで、3つの案（予想）について疑問を出し合った後、全体で、"おたずね"としての討論をする。

――鉄のように固いものを、型の中に入れられるのですか――鉄をドロドロにして入れるんだと思います。――鉄がドロドロになるのですか――砂鉄をドロドロにするのだと思います――型の中に入れた鉄は、ひっつかないのですか――ナイフで切ったり、何かでたたいたりしてとるのです。――型にはめるといったけど、どういう型にはめるのですか。丸い型だと、次の鎖につながらないと思います。――先の方だけあけておいて、あと、カナヅチか何かでたたいてひっつけるのです。ウの人におたずねします。どうしてまげるのですか。――大きな機械でまげるのだと思います――それだったら、きれいな

形にならないんではないですか.（だから この子たちは型にはめた）――
うまくまげたらできると思います. それにひっつけたところがありました。
――どうしてひっつけたんですか――熱くしたらひっつくと思います……

予想には はっきりとした根拠があるわけではない。相手にその不備をつかれながら より確かになったり ぐらついたりしていき, さらには 大きな疑問をかかえていくのである. "なんだ. こんなことが" と思っていたことが. "いや待てよ. おかしいな" と考え直していく大事な段階である.

そのためにも 実物を見たり, 触れたり, 持ったりした手ごたえは かなり大きな力をもっていた。しかも. 間にかいて. グループを通して討論させたため. 子ども同士のやりとりは活発になった。

(2) 書かせることを確かめていく.（再現活動）

① 見学で心に残ったことを絵にかく……絵にしにくい部分は説明を入れる.
② みんなの前で. 絵の説明をする.
③ 自分と違うところを発表する.

……――くこで. 機械で鎖がまわってきたとき. おじさんが これ（スタート）を入れました. 両方からおされてつきました. ――ぼくは やり方は同じだけど, その絵みたいに（おじさんは）棒をもいていなくて. しんけんな目つきでした. ――（教師）どこを見ていましたか――前かがみで鎖の間を見ていました――鎖がまわってくるまでとは. 顔がちがっていました――……

絵にかかせてから討論に移すと. 生産工程だけではなく. そこから人間の働きに目が向くことになる。「顔も真あつい感じでびっくりした。火があるのに。やかましいし. あついし. よう働いてると思った」とも発言した子がいた。

(3) 共感能力を育てる.

「このとき. おじさんは どんなことを思ったり感ったりしながら 働いているでしょう」といった発問により 討論させていく.

第6分科会

研究主題　ひとりひとりを生かす指導に向けて

——算数指導を通して——

愛知県春日井市立小野小学校　辻　善造

要旨

算数指導を通し，ひとりひとりを生かす方法の1つとして，教科の底を流れる“見方・考え方”を身につけることを重点に取り上げた。この“見方・考え方”を身につけるには，授業に主体的に取り組むことが必要となってくる。そして，この主体的な取り組みの場を作る方法として，小集団活動をとりあげた。

研究内容

1．はじめに

パズ学習として，小集団（1つの班6人）を中心とした相互活動とした。算数科における相互活動としては，説明をする活動と説明を聞く活動を主なものとした。

2．相互活動のねらいの概要

(1) 説明する活動のねらい

・わかったことを，言葉や図などを通して表現する場を持つことで，記憶として残しやすくしたり，主体的にわかることをねらう。

・相手にわかってもらえるよう整とんして説明する場を持つことで，筋道を立てて考える力を育てることをねらう。

(2) 説明を聞く活動のねらい

・説明する者に対して聞く人数が少ないため，「ここがわからない。」と主体的に聞く態度を育てることをねらう。

3．“ひとりひとりを生かす指導に向けて”留意すること

(1) 学び方を身につけさせる指導

いろいろな単元に何度も出てくる見方・考え方に気づかせる。そして，その良さを感じさせ，新しい単元でそれを使えるようにする。このように，見方・考え方を進んで使わせることが，ひとりひとりの考えを生かした指導となるととらえる。

以下，その例をあげてみる。

（例1）

“小数・分数の数値の入った文章題で立式する時，整数におきかえての類推から立式する。”という見方

この見方が使われる単元は，5年“×（小数）”“÷（小

数)" 6年"×(分数)""÷(分数)がある。そこで、5年生でこの見方の良さを感じさせれば、6年生では、この見方を進んで使うようになると思う。

5年 演算決定単元「キャンプ」の指導概要

(問題) よしきさんたちは、子ども会のキャンプでカレーライスをつくることになりました。やお屋で、じゃがいも(1.2kg入り216円)、玉ねぎ(1.5kg入り240円)、にんじん(118円)を、それぞれ1ふくろ買い、肉屋で、牛肉を1.5kg(1kg3450円)、カレーのもとを3はこ(1はこ225円)買ってきました。米は、それぞれの家から持ってきました。

① じゃがいもと玉ねぎ1kgのねだんは、それぞれいくらでしょう。

② 牛肉1.5kgのねだんは、いくらでしょう。

③ カレーのもとは、1はこに0.15kgはいっています。3はこ分で何kgになるでしょう。

——以下の問題略——

(指導)

1.2, 1.5, 0.15などの小数が入ると、イメージを浮かべにくいので、それらの小数の代わりに、2, 3などの簡単な整数を入れて立式する。この類推から、この問題の立式をさせる。

(例2)

"10以上の数を扱う時、10の束を利用する"という見方

この見方が使われる単元は、1年"20までの数""拾何と何""くり上がりのあるたし算""くり下がりのあるひき算"がある。

初めの2単元は、この見方により、数えやすくなったり、既習の1桁どうしの計算(くり上がり、下がりなし)と関連づけやすくなる長所がある。

後の2単元は、この見方により、10の補数を利用して計算できるため、正確に速くできるようになる。

1年 指導概要

・○○○○○○○○○○○○○○ (10の束を念頭において)→ (10)○○○○○○○○○○

・17−4 (10の束を念頭において)→ (10+7)−4 (10の束を別にしておいて)→

10+(7−4) → 10の束と3 → 13

・8＋3 $\xrightarrow{\text{(10を意識し、8の補数2を念頭に)}}$ 8＋2＋1 $\xrightarrow{\text{(10の束を念頭に)}}$ 11

・13－9 $\xrightarrow{\text{(10からならいつも引けることを念頭におき)}}$ 3＋10－9 $\xrightarrow{\text{(9の補数を念頭に)}}$ 4

(2) 筋道を立てた見方に注目させる指導

既習の知識どうしをつなぐ論理に注目させることで、新しい知識をその論理の上に整とんすることができる。すると、ひとりひとりの知識が体系的なものとなる。このような知識は、新しいことを学習する時、役立つものであり、ひとりひとりを生かすものとなりうる。

(例1)

6÷0.2 のやり方を既習のこと結びつけさせる指導

(指導前) 小数のかけ算、わり算のまとめテストをしたところ、整数÷小数の正答率がめだって悪かった。

(指導)「0.6÷2, 6÷0.2, 0.6÷0.2 それぞれのやり方を、6÷2とどのように結びついているか、説明方法を考えよ。」と課題を出す。その結果、班に1人ずつは説明できそうだったので、班で説明させた。その後、よくわからせた説明を全体の場で説明させた。

(児童の説明)

0.6÷2 ⟶ 6÷2＝3とやって、前に小数点がある分、積の小数点を前に出す。(「わられる数が1/10になっているのだから、答えも1/10になるはずだね。」と意味面を補足)

6÷0.2 ⟶ 6÷2＝3とやって、後に小数点がある分、積の小数点を後にする。(意味面を補足)

0.6÷0.2 ⟶ 6÷2＝3とやって、ちょう消しで3。

(聞いた者の反応) つまずいた11人のうち、7人は、その場で理解し、つまずきを解消。

(例2)

60÷0.2のやり方を、既習のこと結びつけてする指導

(児童発表1) --- 60×0.2と結びつける

60×0.2　60×2とやると 2は、0.2の10倍だから積も10倍になる。そこで、60×2÷10とやった。同じように考えると、

60÷0.2 を 60÷2とやると 2は、0.2の10倍だから商は1/10になってしまう。そこで、60÷2×10

(児童発表2) ---- わる数を規則的にかえる

60÷20, 60÷2, 60÷0.2 とわる数を、1/10ずつにすると、積は10倍ずつになり、3, 30, だから300となる。

4、“ひとりひとりを生かす指導に向けて”と相互活動との関連

“ひとりひとりを生かす指導に向けて”という目標のもと，相互活動という手段は，どのように有効か考えてみる。

この目標のために，見方・考え方を身につけさせることの大切さは，“3”で書いた。この見方・考え方を身につけるには，受け身では，効果が上がらない。“2”で書いたように，わかったことを，説明しやすいように整とんし直すなど主体的な態度が必要となる。そのため，説明する活動は，この目標のために有効と考えられる。

さらに，高学年になると，数と小数，数と分数など，計算のイメージの持てないものがでてくる。このような内容に対し，表面的な対応しかできず，つまずいていく者がいる。一方，それなりに理解はしていくが，それを意識的に整とんしないでいる者もいる。そこで，この両者を生かすため，相互活動を利用したい。理解した者に説明させる場を与えることで，筋道を立てて整とんする機会が与えられる。説明し納得してもらったことで，筋道を立てて整とんすることの大切さを知らせることができる。一方，表面的にとらえていた者も，教科の底を流れている筋道のあることを知ることができる。よって，“ひとりひとりを生かす指導に向けて”の目標に対し，説明する，説明されるの相互活動は，有効と考える。

5、今後の課題

まず第1に，説明のレベルを高めたい。というのは，やり方の手順を伝えることだけを説明だと思っている者がいる。そこで，“児童なりの多様な論理を使えるようにする。”“説明に使う児童の言葉，図などを豊富にする。”などの指導で，説明のレベルを高めたい。

次に，聞く側に“ここまではわかるが，ここがわからない。”と主体的に聞かせたいが，実際には，このようにできる者は目立んでいない。このようなことができるには，わかりたい課題と似た課題のやり方や理由などがわかっていて，初めてできるものだろうか。それとも，苦手だからという，心理的な面があるためだろうか。とりあえず，聞く側の指導を工夫していかなければならないと思う。

第6分科会　　実践研究

研究主題　　バズ学習による教科指導の方法
－ おちこぼしのない指導に向けて －

兵庫県姫路市立高丘中学校　井 端 保 夫

1．要　旨

本校では、一部の生徒を除いて学習用具の忘れ物、宿題忘れが多く、授業に関して積極性に欠け、学習意欲を喪失している者が学年が進むにつれて増えている。このような実態から教え中心、一斉授業を反省し、小集団の力を借り、ひとりひとりの学習がもっと活発で積極的になるように、次の点に重点をおいている。

（1）学習の筋道を明確化し、生徒にも認識させる。

（2）学習形態として、「個人による学習」と「小集団による学習」とを互いに関連づけて学習課題の解決を図る。

（3）生徒の活動の場を多くする。

（4）自分の学習成果を自ら評価する機会を増やし、自己の学力を確かめる。

ために「バズ・単元見通し学習」を基盤にした学習方法が取り入れられている。

また、姫路市数学教育研究会において、評価することによって、生徒のつまずきの解消を図り、指導内容の精選をすすめ、基礎・基本の定着を図る研究が進められている。よって、姫路市の到達度評価テストの「正の数・負の数」の分析と指導経験からつまずき易いポイントをおさえ、指導方法や指導計画及び教科書の単元見通し等の検討を加え、授業の中で理解への手だてをより個別化しようと試みてみた。

2．正の数・負の数の指導の問題点と考察

① 正の数・負の数の計算をわかり易く指導できる手だてはないか。

② 加減法で最初から（　）をつけるか、それとも漸次（　）をつけないで指導するのがよいか。

③　3つの数の大小関係を不等号で表す問題をどう指導するか。

④　逆数の意味をわかり易く指導する方法はないか。

⑤　絶対値の意味をどのように理解させるか。

⑥　$(-3)^2$と　-3^2の違いをどうおさえるか。

⑦　混合計算の計算順序をどうおさえるか。

①については、正の数を貯金○、負の数を借金●として、小集団を利用しながら感覚的につかませる。②については、(　)をはずすことに困難を感じる生徒があり、興味をもたせながら漸次(　)をつけないで代数和に移行する方がよいと考えた。③については、数直線を必ず併用させることによって、大小関係の順序を理解させる。④については、正の数の除法を乗法に直すことから逆数を定義し、負の数の逆数も同様に定義する。⑤については、絶対値は正の数、負の数の四則をより一般化する時に必要であるが、符号を取り除いた数字だけと指導し、あとから距離による裏付けをする。⑥については、$(-3)^2$と-3^2を対比して指導するとともに、$(-3)^2=(-3)\times(-3)$、$-3^2=-(3\times3)$と原点に戻りながら繰り返し指導していく。⑦については、左から順にやる生徒がいるため、乗除を1つのブロックと考えさせて指導した。

3．今後の課題

今まで、「正の数・負の数」の指導は数直線を中心に TP 等を利用してきたが、低学力の生徒にとって“同符号の2数の和は2数の絶対値の和に共通な符号をつける。異符号の2数の和は絶対値の差に絶対値の大きい方の符号をつける”ということがなかなか理解できない。そこで、理解不十分な生徒に対しては貯金、借金で再指導していた。今回は最初から TP 、プリントを利用しながら貯金、借金で指導してみた。授業の中では興味をもち理解していたが、反復練習不足のためテストで点数のとれない生徒、小数・分数になると手をつけない生徒等指導の不十分さを痛感した。さらに、授業のポイントをしっかり見極め、どこで、どのように生徒をゆさぶり、問題解決へせまらせるかという指導技術、レトリックの研究を深めていきたい。

第7分科会　実践研究
（主題）「バズ学習による生活指導の方法」

非行、いじめ、登校拒否の解決に向けて

豊川市立東部小学校　鈴木　昭

1、はじめに

今の小中学生の親のほとんどは、戦後生まれである。しかも困苦欠乏に耐えて、復興の努力を、国民一人一人が背負って、必死に生きてきた時代を、実感としてもっている親は少ない。そして、高度成長の経済時流の中で、「物こそ大事」という考えと、自分本位の生活論理を定着させ、自己のみを大切にする社会風潮をつくってきてしまった感がする。こうした親の中には、欲望の所産として子どもをつくり、大人の都合に合うように子育てしてきた。したがって、耐性のなさとか、身勝手さは、親が教え、子どもは甘さとか身勝手さを、あたりまえのこととして育ってきた。まさに「地球は、わがためにのみ、まわっている」のである。

2、非行生徒（グループ）に対する指導

(1)YとMを中心としたグループが結びついて（中3）

ア、Yが隣接市の中学校より転校してきた頃の学校 ——→ ・Mを中心とした数名の悪学グループはいた。（教師の注意に服従）

・Yはすでに、対教師暴力、オートバイの暴走行為があり、指導不能状況にあった。
・転校にあたって、上記実内全くなし。
・初対面は、とてもよい。

・Yとの近づきが急速化し、喫煙、シンナーの常用はじまる。（教師、状況キャッチ遅れる）

イ、Yが本性を出してきた ——→ ・公然と喫煙、暴言、暴力をふるう。

・母親バー勤務で夜の仕事で、男がいて（ヤクザ）時には外泊。
・学校の呼び出しで来ても、おどしをかけて、全くきかず、バーで来客に学校批難をする。

・髪型をかえ、着色もしてくる。
・服装がかわり、グループ仲間でそろえる。
——→串やオートバイの暴走
・同級生、下級生より金品をまきあげる。

ウ、指導

・部への復帰は失敗 —— 部活の教師が受け入れの努力をしないし、部員も白々しい。
・Yの学級担任の対応 —— 口のきき合える仲間とのグループづくりと、教師の厳しい愛。
・Mの学級担任の対応 —— 2～3の教科担任と教師グループをつくり、Mと心の交流を続ける。
・他の生徒の担任の指導 —— 3学級ほどの担任（男1、女2）は、全く他力本願で、教室に非行生徒のこないことをのぞみ、かげで他の生徒達に、ダメがきどもだと話している。
・年賀状のはなし —— Y、Mの親が態度をかえる。（指導の手がかり第一歩）
・伊勢小旅行から —— 子どもの本当の姿をみる。

現在は？　Y（よし）　M（少年院）

相互理解 ——→ 相互作用できる。
信頼関係 ——→ 従うことができる。

(2)Sの場合（中2 ～中3）

煙草、薬物乱用、恐喝、暴力行為、オートバイ暴走

・教師と生徒との相互関係の密度によって違うこと。
合う集団と合わない集団
（自分を認めてくれる集団）（規制のある集団）

3. 登校拒否生徒に対する指導

(1)登校姿勢は示すものの、朝になると登校できなくなるI子(中2)

ア、拒否のはじまった前後のようす------笑顔の少ない、おとなしい子であったという。

・生理がはじまった中1の2学期—— 学業不振の訴えあり。欠席、早退多くなっても、担任放置。
・中2のはじめ—— 口数少なくなり、家でも閉じこもり勝ち。親は理髪に忙しく放置。
・親が近所の体面もあって、さかんに登校をすすめるようになると、一人部屋へ。——→ その押入へ。
・親が学校近くまで車でつれてきて、置いて帰る。——→学校へは行かず、いつか帰宅している。

イ、半日、時に一日出校できるようになるまで (指導)

・家庭訪問でなく、教師が遊びにいく。(登校を促す発言は全くしないこと)
・子どものいる以外のところで、子どものようすを、できるだけ詳しくききとる。
・教師と同じ態度で接するように、生徒(小グループ)達によく言いふくめ、遊び訪問させる。

児童相談所員とも連絡をとりながら。

・生育歴をしらべる—— やがて、登校拒否のはじめ頃、生理処理に失敗があって、学校ではずかしい思いをしたことがわかる。
・行事に参加させる—— プレーデー、キャンプ、遠足、——→修学旅行(中3)

(2)「わたしが学校行ったら、先公困るだろ」という丁子(中3)

・人工中絶4回くり返す丁子の家庭事情——歯止め利かず、なりゆきまかせ。
・同級生とは 完全な断絶——学習集団から、はみだした人間であるという捨てばちな気分あり。
・つっぱり仲間の構造——同世代の中では女王的存在。

4. いじめに対する指導

(1)今のいじめと昔のいじめ——自然の中での浄化の芽、指導する場と人と方法の違い。
(2)いじめられるタイプ——いじめる者にも、いじめられる者にも、ある一つの特徴が友だちとのつきあい方、いじめられっ子と、きらわれっ子。
(3)対応のきめ手は——早期発見、早期対応——→バズ集団で、相互理解、協力、よりよい人間。
グループ競争は不可(ついていけない子がいじめられる)
関係の樹立のための訓練をすること。

5. アンケート調査による生徒指導上の問題点。(非行、いじめ、登校拒否につながる要因)

(1)学校や教師にかかわる問題

全体的に、自らが規範となる心構えの欠如と、自衛本能の身勝手さが目立ち、対教師、対生徒、対父母とのコミュニケーションが不足している。また自分自身が、比較的順調に、優良生徒で暮してきた過去の実績から、心に痛みをもつ生徒、こぼれたくなくともこぼれていく生徒の悲しさが、本当には理解できず、頼りがいのない教師になっている。学校自体、他からの圧力に、我慢屈伏することもあり、どこか弱さがある。

(2)児童・生徒の問題

甘えが身についていて、自分の欲求に対し、すべてまわりの者が手を尽してくれることを当然と思い、他人に対する思いやりは乏しく、規制に対しては強い反抗の姿勢を示す。それでいて、一人だけになることをひどく恐れ、一人になると無能になる。

(3) 家庭の問題

家庭生活の正常な維持に必要な秩序がなく、自己主張がお互いにつよく、ゆずり合う気持ちが乏しい。親の倫理観、価値観はばらばらで、子どものために、親が協同して、自ら手本を示して育て導くようになっていない。そして金銭や物で解決する心組みが強く、あたたかい、本当の意味の愛情がなくなってきている。問題がおこると、そのほとんどの家庭では、全く驚き、おそれ、悲しみ、お手あげの状態である。

(4) 地域・社会の問題

どこかで、誰かがやってくれることを期待し、批判、評論は続出するものの、言論のみが空転して、具体的に、一人一人が責任をもって、非行問題の解決にのり出す施策もない。(匿名電話、たれ込み、大はやりである。) 自分のところでなくてよかったという感覚がつよい。

(5) 情報・文化の問題

あとはどうなろうと、当事者がしっかりやれというくらいの無責任きわまる記事を、しかもでっちあげて出すところがあり、人々を動揺させ、心配させたことに対し、自省することがほとんどない。また商業主義に徹し、売れればよいということで誇大化した報道、よりつよく読者にショックを与えるような記事を、なりふりかまわず出す週刊誌もある。いずれも、報道が言論を武器として、ことばの暴力をふるい、時に凶器となって、人々の善意や努力をふみにじっていくことがある。(いじめはマスコミによって、必要以上に誇大化、深刻化されたという向きもある。)

6、問題解決のための提言

生徒がひきおこすいろいろの事犯を直接担当している生徒指導主事の、頭をかかえ、困惑した暗い表情が目に浮かぶ。そして片隅では、ひそひそささやきかわし、名案も浮かばないままに肩をおとして散っていく教師の群。連日の協議と外部との応待に疲れきった管理者などの姿が、うすぼやけた暗いシルエットとなって映る。反転して、学ラン姿(いつからか、かっこよい流行語になった)の生徒が堂々と学園内を闊歩し、煙草をふかした生徒が通る。一方、これと全く対象的に、明るい太陽の下、スポーツにはげむ健康な若者の生々とした姿がある。明と暗とが交錯して、一時代前には全く見られなかった学校の様相が、現実に見られる。

(1) 学校組織としてなすべきこと

ア、基本的生活習慣の確立について

- ひとりひとりを伸ばすとか、個性を伸ばすとか、口では言いながら、実は、学校のきまりが、あらゆる面にまでわたって、こまかく規定されすぎていないか。
  守れない、守らない項目も、何年も記載されているという事実
  「きまりの守らせ方」について —— 「きまり」はつくるが、実行はできない
- 基本的生活習慣をつけるためには、いつも、どこかで何らかのかたちで自覚するチャンスがなくてはならない。

イ、教職員の共通理解、組織、体制強化に関すること

- 体制の強化をはかること —— 問題行動事例に即応した基本的指導体制をつくっておくこと。

・大規模校においては（30名以上の教職員を擁する学校）、基本とし、共通理解のための指導については全体会で行うものの、できるだけ、組織上のグループを使って集団化し、十分に具体的にお互い気楽に話せるようにすること。
・常に教師は、人間関係をよくし、共通理解と同一歩調の実践指導のできるような雰囲気を作っておくこと。

ウ、教師と生徒との信頼関係強化について
・人は誰でも、他から認められていたい本能がある。生徒は先生に認めてもらいたいのである。そして、生徒は先生が自分の最もよき理解者であってほしいと願っているものであるということ。
・学級経営では、孤立した子のない、みんなお互いに十分話し合える、助け合えるようにし、生徒指導の目標になる「自己指導のできる人づくり」に、力点をおかなければならないということ。
・非行生徒の指導も、学級担任が結局は一番の窓口であって、逃げてはならないということ。

エ、問題生徒の指導と対応
・暴力犯罪については、現在では、学校教育の限界をこえている部分があり、緊急な対策が行政司法の面で確立されるべきだ。しかし、学校として、先生として、どこまで何をすべきかを教職員がこぞって真剣に検討し、安心して、ぎりぎり限界まで指導のできるようにしておくことが大切。
・PTA、少年補導員、警察を導入し、学校の正常化をはからなければならなくなった場合、それぞれとの共同指導の仕方、役割分担、事後処理等、綿密な打合せのもとに実行しなければならない。また、こうした場合には、他の生徒のために、ガン細胞は外科的手術によってとり除く勇気をもってほしいということ。
・性非行対策——最近は女子非行が男子を上まわってきた。この指導には専門指導員が必要である。
・すでに事犯をもつ生徒、問題行動をしている生徒などに対する指導は、その生徒を知り、ある程度の信頼を受けるようになっている人でないと、指導はむずかしい。

オ、学校と家庭と地域との連携について
・学校と家庭との連携方法、学校と地域との連携方法——気心よくお互いが連動し合える結びつきを作っておくこと。

(2) 家庭としてなすべきこと
ア、親が保護者としての義務をもつと感じること——厳しい行政指導を期待する

イ、家庭における基本的な躾け方、守らせ方

(3) 地域社会としてなすべきこと
ア、保護政策のつよい現在の青少年対策に、凶悪犯、無謀行為を阻止する施策をもり込むこと。

イ、地域社会の浄化運動が、まだ個々にわたって浸透していないこと。

ウ、マスコミへの道義遵守を要望すること。

第７分科会　　実践研究

研究主題　バズ学習を取り入れた清掃活動

兵庫県　姫路市立林田中学校　喜　多　英　雄

１．はじめに

本校は、姫路市最北西部に位置し、純農村地帯であり、地域の学校に対する期待と関心は非常に大きく協力的である。しかし、このように自然環境・人的環境に恵まれた本校でも３年前までは、いわゆる『荒れている』という状態であった。授業妨害・授業エスケープ・対教師暴力・器物破損など“学校”といえる状態ではなかった。

そのような実状をふまえて、一昨年度『林田の流れを変えよう。』をスローガンに全職員が立ち上がった。清掃活動にも力を注いだが、生徒の意識改革、風紀面に重点を置いたので満足のいく結果とならなかった。

昨年度は、正常化への道を歩むために、生徒会の活性化を学校努力目標の重点課題とした。この具体的実践の一環として、『創ろう！美しい環境』をテーマとして、整美部を中心とした校内環境の整美・自主的な清掃活動について研究実践を積み上げ、大きな教育効果をもたらした。

本年度は、『創ろう！輝く学校』を整美部の最大目標として、全教師・生徒とも力を一つにして、昨年以上の成果を出そうと頑張っている。

２．実践例

（１）基本方針

Ａ　清掃活動の流れ

●月曜日から金曜日まで

（１）清掃準備｛１４：０５～１４：１０｝

ア　女子更衣（女子はスカートをトレパンにはきかえる。）

イ　見て回った感想（整美週番が前日見て回った感想をいい、悪かったところをクラス全体に注意する。）

（２）清掃活動｛１４：１０～１４：２７｝

（３）清掃バズ｛１４：２７～１４：３０｝

清掃分担区ごとにその場で点検カードを基にして、各班の班長が清掃の反省をする。

（4）清掃の反省｛敬業の中で｝
各班の班長が清掃内容を発表し、問題点があれば全体で討議する。

●黙（だまって）・速（さっさと）・精（一生懸命に）の清掃活動を行う。
●土曜日は、3校時終了後次週の清掃計画を立てる時間になっており清掃活動は行われない。

B　点検カード

各クラスに整美週番用の点検カードと学級用の点検カードを用意している。清掃分担区の構成は各学年、各学級ごとに異なっているので、点検カードの枚数はクラスによって違う。点検カードは、前の黒板の下に吊り下げていつでも点検できるようにしている。

C　整美週番

各クラスから整美週番4名、合計36名を整美週番として4班に構成する。1班の構成は各クラスより1名、学年3名全校で9名とする。各班毎に班長を置き、教師・生徒とも腕章をつける。毎日の活動としては放課後、整美週番は整美週番用の点検カードと各学級用の点検カードを持って、職員室前に集合する。そして、担任の先生と一緒に清掃分担区を見て回り学級用の点検カードと整美週番用の点検カードに意見・感想を書く。それを担任の先生に見てもらい、各学年の整美週番日誌に記入する。

D　清掃班・清掃分担区

清掃班の決め方は、次の2通りから選択するようにしている。
（1）学級での生活班で、班単位で希望をとって分担区を選ばせる。
（2）学級での生活班関係なしに、各自で自由に希望をとって分担区を選ばせる。
柔軟性を持たせて、各学年、各学級の選択に任せているのでクラスによって異なっている。
以前は、1週間ごとに清掃分担区を移動していた。しかし、1週間ごとでは、生徒にしてみれば掃除をする手順・方法がつかみにくい、清掃分担区に愛着がわかない、また教師にとっても誰が、どこを、どのように清掃しているか把握しにくいという問題点があった。それで1学期間は、清掃分担区を変更しないというようにしている。

E　清掃用具

清掃用具と言うのは、自分の物ではないという意識があるので乱暴に扱いがちである。それで、責任感・愛着心を抱かせるために生徒の名前をラベルに書いて清掃用具に貼っている。『これは、君が１学期間使うものだから大事にせえよ。ほかの生徒が貸してくれといっても、君のやから貸したらあかんぞ。』といって渡している。清掃用具は、必ずひもを通してぶら下げるようにして、いつ誰がみてもわかるように、清掃用具をかける場所にラベルを貼っている。

（２）清掃バズ

昨年度より清掃活動の中に清掃バズを取り入れている。清掃活動終了３分前に『清掃バズを初めて下さい。』という放送の後ただちに、清掃班の班長は、班員を集め、点検カードの項目にしたがって清掃活動の反省をする。この反省を基にして次の日の清掃活動の内容を検討する。初めのうちは、生徒自身も戸惑っていたが、『今日は、窓拭きがあまり出来なかったので、明日は窓拭きを重点的にします。』というような意見がでてくるようになっている。１日の清掃活動の区切りという意味で清掃バスは重要な位置をしめている。

（３）敬業時（バズ学習）における清掃の反省

清掃バズにおいては、清掃班単位での反省をするが、敬業時（本校では、ゆとりの時間を敬業と呼んでいる）には、クラス全体で討議する。整美週番が司会をして、各清掃班の班長に清掃の反省・次の日の清掃内容を発表させる。慣れてくるにしたがって、どの班も『出来ました』、『出来ました』というようになるが、『あれで出来ているのか、もっと美しくなる方法はないのか。』と追求しているようにしている。

（４）清掃計画

土曜日は清掃活動は行わずに、３校時終了後１５分間を次週の清掃計画を立てる時間に当てている。各学級で各清掃班に分かれて、重点的にしなければならない作業を話し合う。整美週番は、各清掃班の点検カードをチェックして、不十分なところは書き直しをさせている。

（5）整美週番の引き継ぎ

毎週土曜日に、今週の週番と来週の週番とが引き継ぎを行う。今週の週番は、点検カード（学級用・週番用）と週番日誌を持参する。討議内容としては、週目標の反省・実行できなかった理由・来週の目標の決定・具体的な実行案などである。方針としては、あくまで生徒主体の討議にしたかったので、話合いが行き詰まったときに、アドバイスするぐらいであった。最初のうちは、生徒も戸惑っていたが回数を重ねるごとに、こちらが予期しないような素晴らしい意見が出るなど、実りある引き継ぎになっている

３．変容の過程

荒れていた時期には、当然正常な清掃活動は行われず、学校内のあちこちにはタンやツバが吐き捨てられ、「汚いから掃除をしない、掃除をしないから汚くなる、汚れていても気にしない」という悪循環であった。毎日のように清掃用具・窓ガラスを破損し、教師が指示したり生徒と一緒になって掃除をすれば、『先生が掃除をすればええんや。』と居直るのが実態であった。

しかし、整美週番の活性化・清掃点検カードの充実・生徒一人ひとりの清掃内容・役割の明確化・清掃バズなどによって、清掃活動が活発になり非常に高い評価を得ている。昨年度の市指定の研究発表会においても、特別に大掃除はせずにありのままの清掃活動を初めから終わりまで見てもらったが、『これが、昨年まで荒れていた学校とは思えない。』、『校舎内外に、一つも空かんやごみが落ちていない。』という賞賛の声を頂いた。

学校が美しくなることによって、生徒一人ひとりの心の中に、「美しくしよう。汚さない。物をこわさない。」という意識がめばえ、生徒の学習態度・生活態度にも良い意味での影響を及ぼした。花壇の花を折らなくなったのはその一例である。清掃用具においても、以前はホーキが年間２００本では足りなかったが、昨年度はわずかに１０数本補充しただけである。またガラスがよくこわされて、ガラス修理代金が年間約３０万円かかっていたが、ガラス磨きを熱心にしているので“ガラスが美しい”と言うこともあってか、昨年度は不注意で１０枚ほどこわれた程度であった。

４．今後の課題

しかし、私自身はまだまだ満足していない。実際、整美部・教師が指導しないと、自分の分担が終ればそれで終わりと考え、時間いっぱいまで掃除をしない生徒もいる。昨年以上、今以上に「もっと美しくしよう」という上向きの姿勢を生徒一人ひとりに育ませ、愛情のこもった清掃活動が出来るようになることが今後の課題であると思っている。